

長岡造形大学
地域協創センター
文化振興センター

地域と協働し、地域を創る

20
23

地域協創センター 文化振興センター について

各センターは、本学の社会連携ポリシーに基づき、広い領域に関わるデザインの特性と教育研究力を活かして地域社会に新たな価値を創出するとともに、教育研究活動の成果を還元することによって地域に貢献することを目的に活動しています。

地域のデザインニーズを一元的に受け止め、有機的なプラットフォームとして教育研究との結びつきを最適化し、それらは様々な活動に実を結んでいます。

事業・活動等の実施にあたっては大学全体をあげて取り組み、そのコーディネーター役として専任教員であるセンター長と事務局を配置しています。

地域社会をデザインの実践的な学びの場とし、企業や自治体・コミュニティ等と協働した課題解決への取り組みを、「社会人基礎力」「構想力」「創造力」を育むアクティブラーニングとして、カリキュラムへの積極的な導入を図っています。



主な取り組みについて



産学官連携・地域社会との連携

デザイン研究開発

本学教員及び学生の研究力や人的資源を活かし、企業や自治体等と連携したデザイン研究開発を推進します。

まちづくり・環境づくりプロジェクト

企業や自治体、コミュニティ等と連携したデザインプロジェクトや地域イベントに、地域協創演習やボランティア実習の授業等を通じて取り組み、地域のまちづくり、環境づくりを推進します。

知的財産の管理活用

教育研究活動から生み出される特許や意匠権などを積極的に保護し、活用に取り組んでいます。



市民の生涯学習・文化活動の支援

市民工房

一般の方々を対象に、ものづくりの楽しさと創造の喜びを本格的な工房で体験できる多彩な講座を提供しています。

こどもものづくり大学校

小学生を対象に、ものづくりや遊びを通して、豊かな感性と創造力を育む場を提供しています。

まちなかキャンパス長岡

市民の方々の“学びと交流の拠点”として、学びを通じて世代や地域を越えた交流を盛んにすることを目的に、市内の4大学1高専が長岡市と連携して企画運営しています。

美術・デザイン勉強会

中学生・高校生を対象に、易しい手法で美術・デザインの専門性を体験する勉強会を行っています。

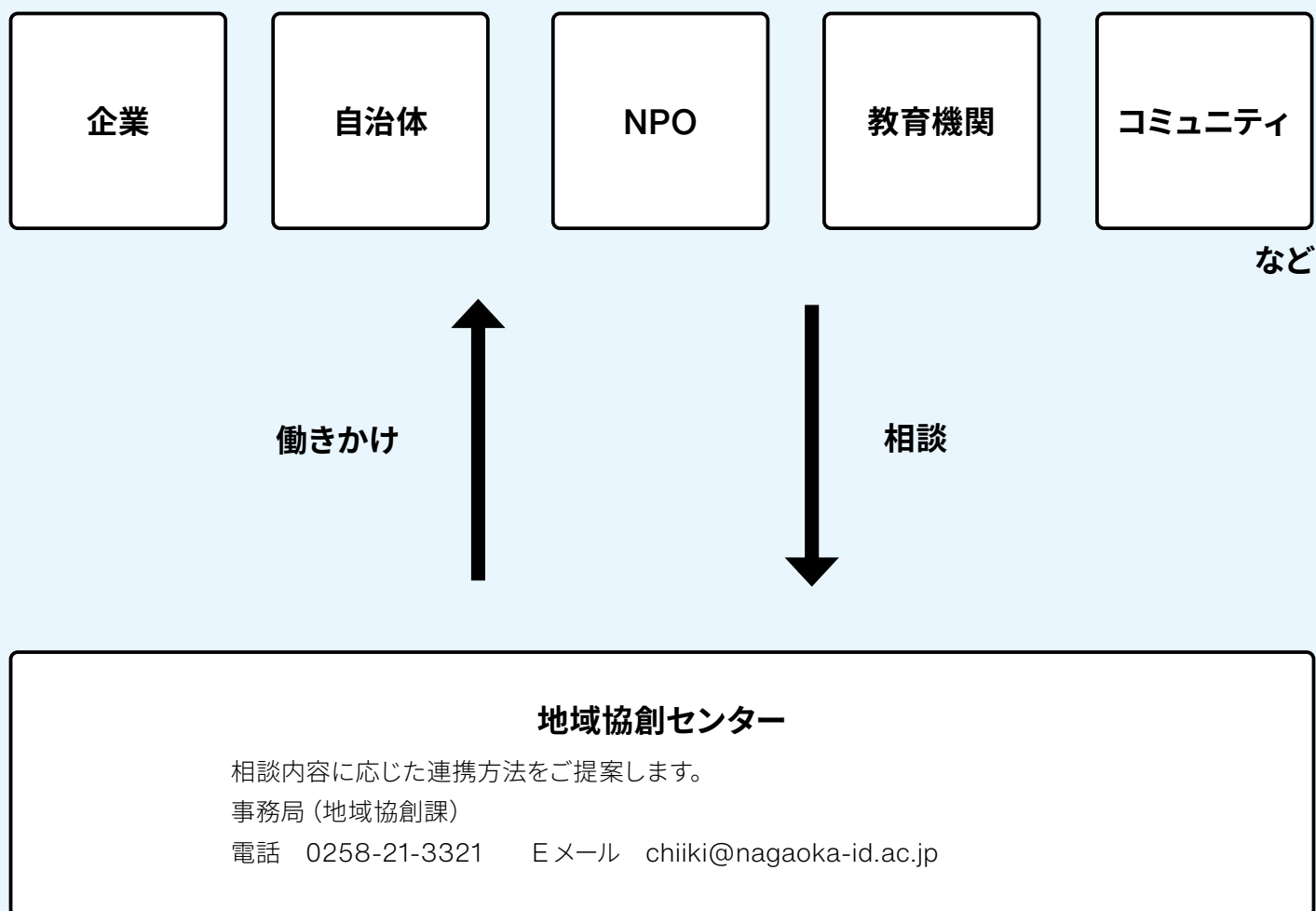
公開講座・講義

各分野で実践的に活躍されている方を講師としてお招きする授業「特別講義」等を一般公開しています。

施設の開放

図書館、ギャラリー、NIDホール、講義室、緑地・庭園等本学施設を市民のみなさんに開放しています。

🗨 センターへのご相談について



◎知的財産について

本学では教員・学生の知的財産の保護に取り組んでいます。連携プロジェクト・授業等で知的財産が創出される場合、権利の帰属等に関して、契約書の取り交わしを行う等のご相談をさせていただきます。

ご相談の例



長岡造形大学ホームページから「依頼・相談申請書」をダウンロードし、必要事項を記入の上、地域協創センター事務局へ提出



打合せ

必要に応じて直接打合せを行います。関係する教員とスタッフで詳しい内容をお聞きし、ご相談内容に最も適した連携方法をご提案します。



デザイン研究開発

教員の研究分野について、研究費を受け入れて受託研究や共同研究を行っています。

地域協創演習等の授業

(学生を主体とした授業での取り組み)

学生にとって教育効果が高いと判断する場合に、授業内で教員が指導のもと学生が課題解決等に取り組みます。

※知的財産に関わる契約書等の取り交わしをする場合があります

講師派遣等

講演会やセミナー、デザイン審査等に専門家の知見を提供しています。

※ご相談に対する回答までには約1か月程度、業務開始までには約2～6か月程度かかります。教員や学生は授業・その他学事が優先となりますので、予めご了承ください。

デザインやアートを学びたい
(個人の方)



大学既存プログラムの紹介

市民工房

(一般の方を対象にしたものづくり講座)

こどもものづくり大学校

(小学校3～6年生を対象にしたものづくり講座)

まちなかキャンパス

(長岡市・長岡市内4大学1高専による各種講座を開催)

学生アルバイト・ボランティアを募集したい



学生アルバイト・ボランティアの募集については、学生支援課をご紹介します。本学様式の「アルバイト求人票」は、本学ホームページからダウンロードすることができます。

学生をインターンシップで受け入れたい



インターンシップについては、学生への就職支援を行っているキャリアデザインセンターをご紹介します。

産学官連携・地域社会との連携

デザイン研究開発	8 - 48
知的財産の管理・活用	49 - 50
地域協創演習	51 - 69
ボランティア実習	70 - 72
地域特別プロジェクト演習	73 - 76

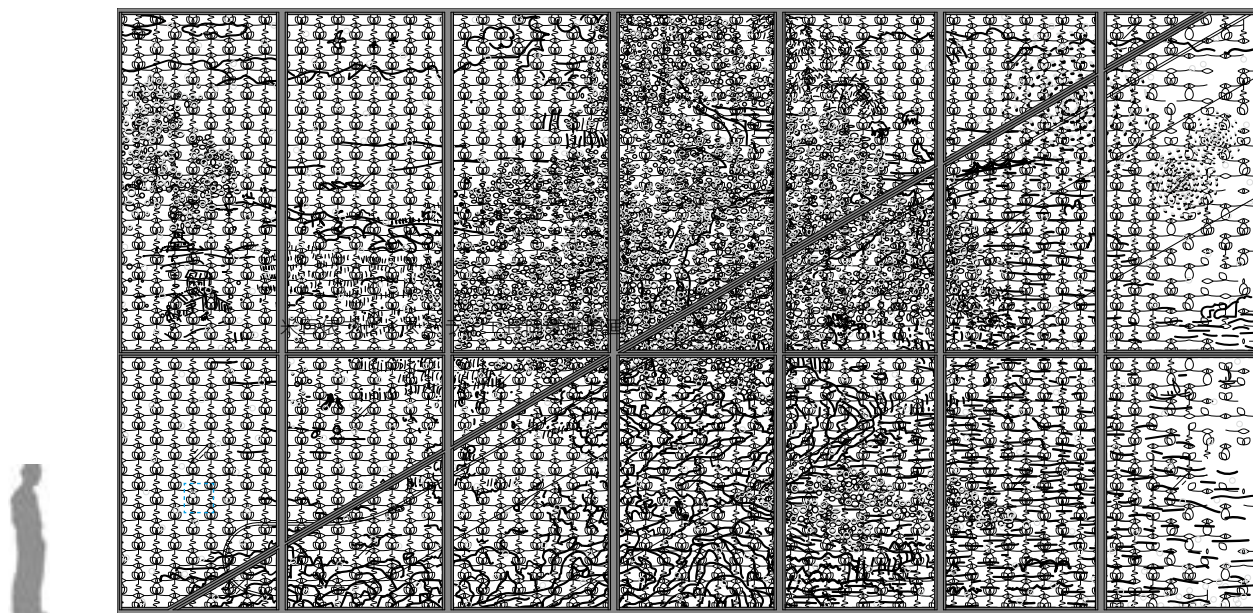
市民の生涯学習・文化活動の支援

長岡造形大学展示館「MàRoù の杜」	78
市民工房	79
こどもものづくり大学校	80
まちなかキャンパス長岡	81
第 25 回長岡市中学校美術部作品展	82
第 24 回亀倉雄策賞受賞記念 大貫卓也展「ヒロシマ・アピールズ」	83
特別講義	84
出張講義	84
熱中！感動！夢づくり教育「夢づくり工房 in 長岡造形大学」	85
長岡造形大学附属図書館	86

**産学官連携・
地域社会との連携**

デザイン研究開発

企業や自治体、地域からの相談を受け、本学の教員と学生が課題の発見・解決に取り組んでいます。デザインの専門大学としてより高い価値、新しい価値の創出につながるような提案を目指すことで、地域社会と本学の教育研究が相互に良い関係を築けるよう努めています。



1.はじめに

昨年度のこの報告書の文頭で「この業務について報告書を作成せよとのことで、さてどうしたものかと。そもそも僕の領域(絵画)で報告書というものを見たことがない。(中略)正直なところ本学の、これらの報告書も着任以降一度も読んだことがなかった。一体誰が読んでいるのだろう(今回の僕の文章を読んだ方はぜひお知らせいただきたい。)」と書いたが誰からも声をかけられなかった。それで、さらにこの報告書、はたまた「果たして画家が制作について書く報告書とはどういうものか」という疑念がさらに深まった。もっと言うなら、「これはD・グレーバーが言うところの“ブルシット・ジョブ”じゃなからうか」という疑いはどうやら、いやこれは言わないでおこう。無論学外の方が読んでくださっていて、僕とは面識もなければ、すれ違う機会もないということはある。そうした方々に向けて真面目に記したいと思う。

そこで、今年も「本学らしくイノベティブに報告書を考えてみよう。報告書の条件として、当該の業務について第三者が、「何が」、「なんで」、「どう」為されたのかということが読み取れば良いということを最低条件として書こうと思うが、絵を描くという業務の質的なものを損なわないように書いてみようという試みとして自分に課してみようと考えた。この質的なものというのは今回の業務で言えば、ある空

間に絵を設置するというものであるが、物理的な事柄の裏というか表というか、活動をドライブする精神的、心理的なものなど一切切を含む感性的思考こそ、この業務の本質であるという見地から捉えることによって表出するという意味での質ということである。」(報告書 R4)

最近では学内でも「いちいち面倒くさい奴」(報告書 R4)という印象が広まっているようで面と向かって言われたりもするようになり本人はニヤニヤするばかりである。このレッテルは僕の取り柄でもあるので、そもそも何をして報告書と言えるのかは相変わらず整理できないままに今年も書こうと思う。「なので、せめてフォーマットぐらいは規定に合わせるが、記述のスタイルは散文的になる。普段、大学院の学生の修士論文などの指導もしており、制作を言語化するという極めて特異な研究に立ち会う身として、敢えて自分の制作について言葉にする機会でもある今回のテキスト(報告書)において、一つの試み、試論(エッセイ)として少々挑戦してみたいとも考えてのことであり、予定調和的、合目的に逐次的に記述するばかりでもないかも知れないと、書き初めに思うからである。」(報告書 R4)と書いた昨年同様の姿勢で進めることとする。

とにかく以下、今年度分の依頼、委託研究、業務についての報告、その経緯顛末をここに記すものである。

今年度の取り組み

今年度の取り組みはおおよそ、原画を、設置する上での仕様の詳細を詰めていくものとなる。

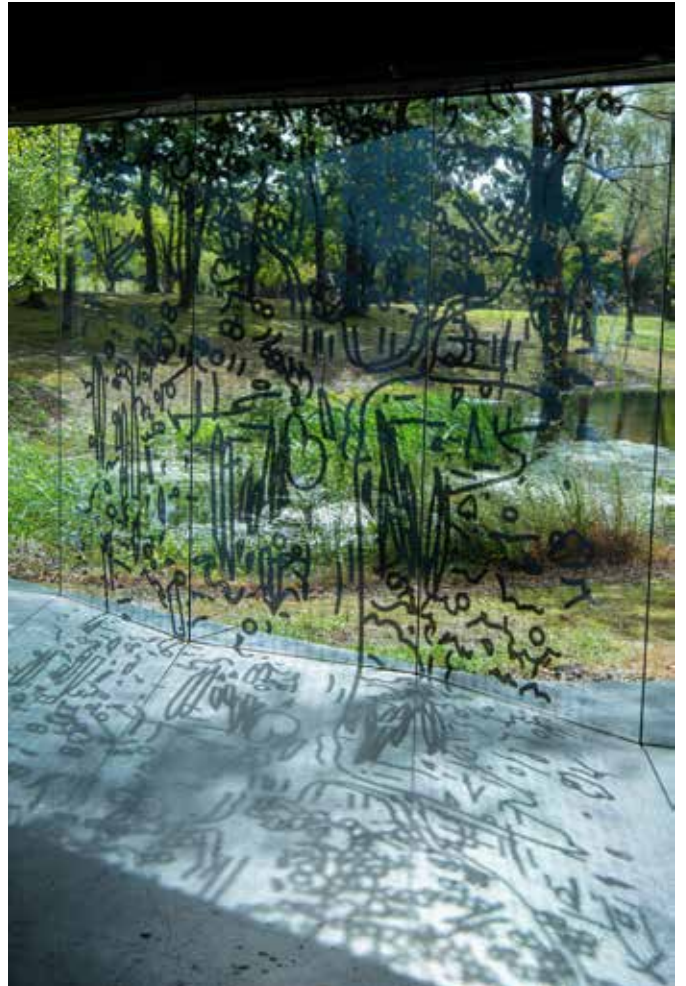
これは主に設置空間とのマッチングの問題であるが、一つは設置面（エスカレータ横のガラス面）との関係であり、もう一つは絵の周辺、背後の壁や床等の空間、場の光や色、テクスチャー等との関係についてである。

昨年度末に長岡市に提出した原画について、市から「良い」との返答をもらったが、もう少し「立体的」「空間に広がるような」というようなニュアンスの意見も同時に伝わってきた。これについて少し検討をすることになった。プロジェクションマッピングとの組み合わせ、設置空間の外壁ガラス面とのレイヤー構成などの意見もあるようだったが、これらはそもそもドリームプランとして当初から似たような考えをこちらも持っていたもので、経済的、建物の意匠との兼ね合いなどの点から退けていたものだった。しかし実は、私の原画作成の過程ではもう1つ別の試案も存在していた。それは原画作成時にさらに加えて1つのレイヤーが存在していたことだった。実はこれも経済的な面から渋々削られたものであった。この大元の意匠の復活は、プロジェクションマッピングなど他の案に比べれば、制作上、設置上も現実的なものであるし、何よりも後付けではなく、原点へ戻るという意味でも自然な成り行きである。

このレイヤーは、原画の中心に大きく広がる大樹の葉をイメージした円状の形と呼応するように無数の円形が白もしくはシルバーで広がるものである。これを再生しシルバーの素材で作ることは可能か検討した。この過程で、第1番目のレイヤーがフィルムに出力で済むのに対し、このレイヤーはカットニングシートでの施工となり、これになかなかの手間がかかるということが判明したが、諸々の問題も含めなんとかこれをクリアすることが可能であるということになった。このレイヤーは後の実証実験でも様々なエフェクトを起こし、市側からの要望にも応え得るものであると判断した。

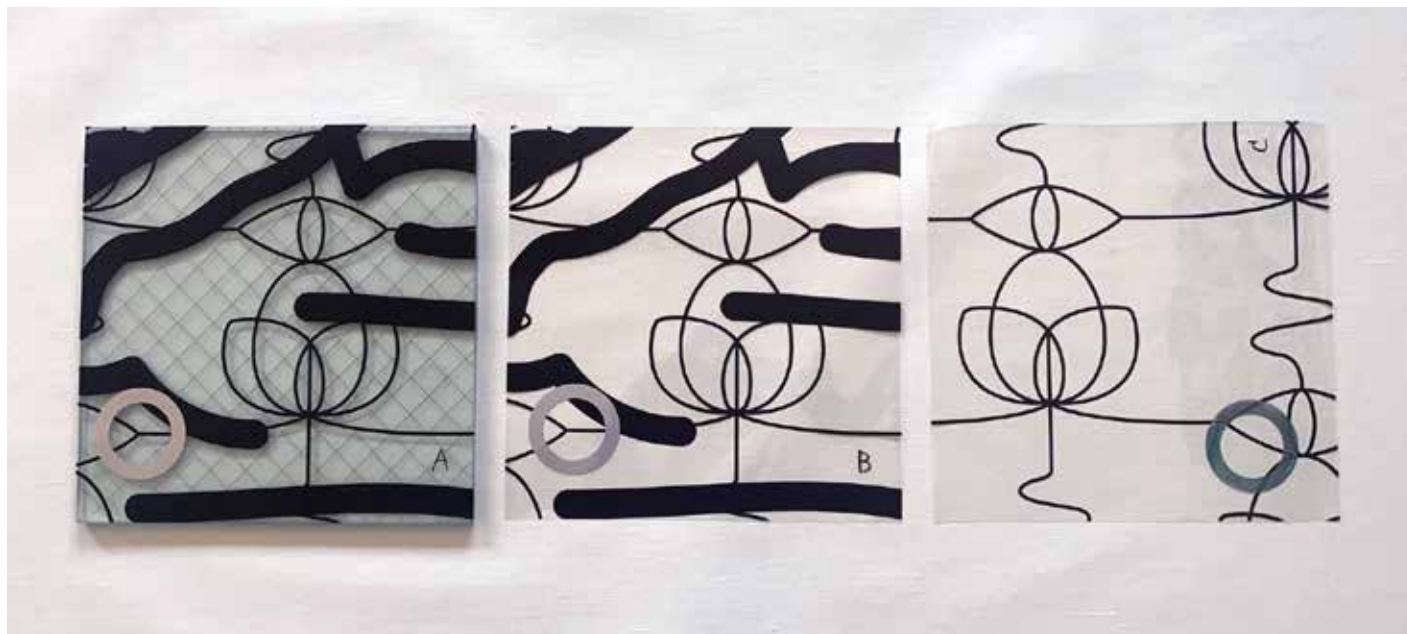
R4年6月ごろに壁面の見本や色味などの確認がなされ、設置面のガラスを区切る棧の色味もおおよそ確定されていた。

こうした細部を徐々に詰める作業と並行し10月に開催される本学展示館 MàRoù の杜での美術・工芸学科教員展において、実験的な試みの作品としてガラス面へのシート出力作品の出品を検討することにした。これは具体的なガラス面へ



の施工や出力の様態の検討が可能であり、実際の施工者に加わってもらう運びとした。（画像2）この作品は私の過去のインクジェット出力をキャンバスの上に施す作品のヴァリエーションで、鏡面にエポキシ塗料をシルクスクリーンで刷るものや、天井から透過性の布にレイヤー状に吊るされ設置するなどの方法を取るものだ。絵画空間をその平面上だけと限定せず、その周辺の環境にいかにか干渉し、それを取り込み、取り込まれつつ、さらには鑑賞者自身のイメージの受容そのものまでも包含しようとする方法のものである。常々、「何が絵画なのか」を考えてきた中で、そこに立ち現れるイメージとは私たちの生と全く切り離すことができず、そうでありながらもそれがすぐさまに有用であるとか、意味がわかるとかいうレベルでは機能せず、いわばサブリミナルに長い時間をかけて身体化されていくものであるという確信がある。本取り組みのような公共空間に置かれる絵が一体どのように空間

※所属等はプロジェクト当時のもの



に浸透し、見る人へも浸透するのか。明らかに僕の作家としての制作上の興味と重なる命題であると改めて感じるところである。

この MàRoù の杜での試みから、本研究の制作への2つのポイントが浮かび上がった。1つは、インクの厚みやそのカラー（黒）の仕様について、もう1つは透過する光による場へのエフェクトである。長岡市、(株)ノムラメディアスとの合同での検証を展示作品の前で行い、これらの問題点について共有した。1つ目についてはインクをC M Y KのKのみによる黒ではなく、C M Y Kを混色することで得られる有彩色の黒が可能か、また、厚みについてインクの噴きの回数を増やし厚みを持たせる（光の透過性が少なくなる）ことの可能性について検討することとなった。またもう1つの光のエフェクトは厳密には最終的な現場でしか捉えることのできない現象ではあるが、照明などの光源により線描が作り出す、床や周辺部に落ちる影のエフェクトなどはネガティブなものとはならないだろう、逆に時間や季節によって複雑に変化し得るポジティブなエフェクトと捉えられるのではないかと予想することができるという意見で一致した。

これらの準備とともに、2番目のレイヤーのシルバーの素材の検討が夏頃から始まった。いくつかのサンプルから2、3の素材を選定することとなった。（画像3）

このシルバー素材はホログラムシートと呼ばれるものであ

るが、バリエーションは豊富でありドット状の模様が見えるものからマット、鏡面、横方向の細微な線状のライン（ヘアライン）があるものなどさまざまであった。この中から鏡面とマットのものを選んで後の実証実験（R5年4月）で確認することとなった。

11月14日に長岡駅近く大手通り沿いに進行している現場への立ち入りが許可され、実際の状況を確認することができた。図面とは異なる現場のスケール感などを確認することができたが、工事はまだ半ばであり空間としてはまだ出来上がっていなかったために、およそのスケール感が把握できなかったにとどまった。

年が明けてやっと具体的な画面の検討に入り、原画を具体的な図面に落とし込みつつ栈との干渉を見直した。ここから一部を30センチ角に切り出したものをサンプルとして長岡市に提出し、今年度の成果物とした。

以上が本研究の本年度分の報告である。いよいよR5年7月末のオープンに向けて研究は続く

令和4年度歴史的建造物総合調査業務

連携先：三条市

受託期間：令和4(2022)年7月29日～令和5(2023)年3月31日

プロジェクト主査：平山 育男（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：佐藤 淳哉（建築・環境デザイン学科 教授）、津村 泰範（建築・環境デザイン学科 准教授）、西澤 哉子

1. はじめに

三条市より長岡造形大学へ対して、歴史的建造物としての価値を明らかにし、文化財保護の基礎資料を整備することを目的に建造物などについて調査の依頼があった。

調査対象はいずれも歴史的建造物について

- 1) 小出家住宅 主屋ほか
 - 2) 小松酒店店舗兼主屋など
- についての調査であった。

2. 小出家住宅 主屋

2-1 小出家の概要

三条市の中心市街地における歴史的建造物の調査として、本年度も三条市本町4丁目に位置する小出家住宅に所在する主屋を始めとする建築調査を継続的に実施した。

小出家住宅は三条市の中心市街地に位置するもので、北三条駅から本町通りに向かう県道8号線に面して位置する。

2-2 小出家主屋の沿革

小出家は大正時代中期から当地において医院を営んでいる。住宅は敷地南側の三条市中心市街地を貫く本町通りに面し、主屋は町家の形式を有する。明治時代初期には交差点から2軒目のみが小出家の敷地で、診療棟以南の敷地と建物は昭和3(1928)年になって小出家が購入したものである。

なお、主屋は本町通りに面して南面し、公道からは建物の西、南面と、東面の一部を望見することができる。

2-3 小出家住宅の概要

小出家住宅の敷地は交差点から3筆分相当の広さとなる。主屋は県道に面し南面し、背面に位置する診療棟は市道に面し東面する。

平面

主屋の入口は南側妻面のほぼ中央部に置かれている。これまでの調査で、主屋については正面側の通り土間に沿う、東側の茶室とショクドウ、西側の1列5室の居室、主屋と背面の土蔵に挟まれた、東側の便所及び風呂、玄関、居室、西側の茶室について調査の報告を行っている。

また、東側のコメグラ、背面のトナリグラ、西側背面に位置するマエノクラ、ナカグラについても既に調査に基づく報告を行っている。

今年度の調査は、マエノクラ、ナカグラに隣接する洋間、板の間及び茶室の「^{きゅうえいしつ}休影室」を実施した。

洋間はマエノクラの南西に配され、マエノクラの表側に配される板敷を介して、入室することになる。前室として幅1間、奥行2間程の板ノ間があり、この南側に2間四方向となる洋間が配される。板ノ間を進むと「休影室」の土庇で、板間の北側が水屋、この西側が茶室となる。水屋は3帖の広さで、北側に便所を設ける。茶室は8帖で、西側に床、棚を構え、北側に5帖の張り出しを設ける。なお、「休影室」の外に、腰掛待合が配される。

構造形式

洋間、茶室とも基礎は自然石切石に柱を立て、足固貫、内法貫、差物などで固める。小屋組はいずれも和小屋組とする。

建築年代

建築年代を直接示す1次資料はいずれの建物からも見いだせなかった。但し取り合いから見て洋間と板ノ間は早く、これに茶室を接続し、更に茶室北側の張り出しを増築したと判断できる。

なお、洋間と板ノ間の天井裏には昭和30(1955)年の新聞紙を配した上に断熱材が敷かれていたことから、昭和30(1955)年頃の建築と判断する。茶室はこれよりやや遅れ昭和30(1955)年代中頃、更に昭和40(1965)年代に至り、増築があったと判断する。

2-4 まとめ

小出家住宅の洋間及び板の間は昭和30(1955)年頃の建築で、茶室「休影室」ややに下り、昭和30(1955)年代中頃に建築後、昭和40(1965)年代に増築があったと判断できる。

小出家住宅は三条市中心市街地において戦前期の外観をよく示すもので、今後の保存が強く望まれる。



小出家住宅
洋間 外観
南東より



小出家住宅
休影室 外観
北西より



小出家住宅
腰掛待合
北より

3. 小松酒店店舗兼主屋など

3-1 小松酒店の調査について

三条市本町1丁目に所在した小松酒店は、店舗兼主屋が昭和4(1929)年の建築であり、平成27(2015)年8月、国の登録有形文化財として登録された。

ところが、令和5(2023)年2月、この建物は解体撤去（維持管理困難）のため登録が抹消され、令和5(2023)年8月から11月の期間で解体されることとなった。

そこで、今回の建築調査では全体的な再調査に加え

- 1) 写真撮影
- 2) 360度カメラによる空間撮影
- 3) 未調査箇所の調査

を実施し、この小松酒店店舗兼主屋の建物について精緻な記録保存に努めた。

3-2 写真撮影

小松酒店店舗兼主屋については、平成27(2015)年の登録前、既に建築調査を実施していた。

今回は建物内の物品、家財道具などを除去した後に、店舗、座敷など主要な諸室について記録保存のため、写真撮影を再度実施した。

3-3 360度カメラによる空間撮影

国の登録有形文化財であった建物であることから、より克明に建物を記録保存するため、3次元撮影が可能であるMatterport社による360度カメラを用いて、建物外及び建物内の全室を撮影し、建物の様子を資料化した。

3-4 未調査箇所の調査 サカグラ

敷地奥に配されるサカグラについては、国登録登録の範囲外であったため、前回の調査においては建築調査が及んでいなかった。そのため、今回は、建築調査を実施し、その概要を知るに至った。調査の概要は以下のとおりとなる。

・サカグラの位置と規模

小松家住宅の敷地は県道の南側に位置し、敷地の北辺から、木造2階建の店舗兼主屋、土蔵造2階建のクラ、そして鉄筋コンクリート造平屋となるサカグラなどが配されること

となる。なお、サカグラはクラ南側の壁に隣接して配されていた。

サカグラの規模は南北方向の長辺が5.6m、東西方向の短辺が3.5mとなり、壁厚及び床厚とも275mm程であった。

・サカグラの平面

サカグラの平面は矩形で、敷地東側に配された通り土間に面し入口を設ける。入口は建物の東面中程に軸吊形式となる鋼製の両開き土戸、内側に木製格子網戸、木製引き込み土戸を開く。また、南面中央に窓を設けており、鋼製両開土戸、木製引き込み硝子戸、引き込み土戸を配する。床はコンクリート叩きの形式であった。

・サカグラの構造形式など

レーダー探査を実施した結果、サカグラの壁面からは金属の反応はなく、屋根スラブでは金属の反応があった。そのため、壁面は無筋、屋根スラブは有筋と判断した。なお、屋根面は扁平の陸屋根の形式であり、この上に直接、後補となる木造の住居棟が束立の形式載る。

・サカグラの建築年代

サカグラの建築年代については、正面の鋼製扉東面に向かって右からの横書きで

記念

開業満三十年

昭和十年

の記載を確認することができた。建物の内外とも改造の痕跡は確認できなかったため、建物は昭和10(1935)年の建築と判断できる。

・まとめ

小松家住宅サカグラは、鉄筋コンクリート造平屋の形式で、正面扉に記される通り昭和10(1935)年の建築と判断することができた。当初から陸屋根の形式であり、上部に別棟の建物を受ける計画であったと判断できる。

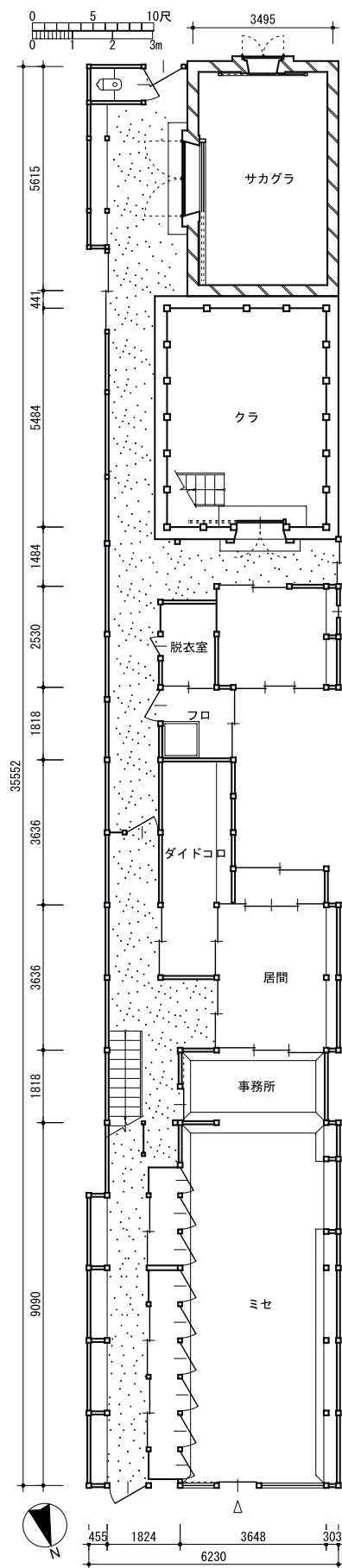


図1 小松酒店1階 平面図



小松酒店 サカグラ 内部 北より



小松酒店サカグラ 天井スラブ上 東より

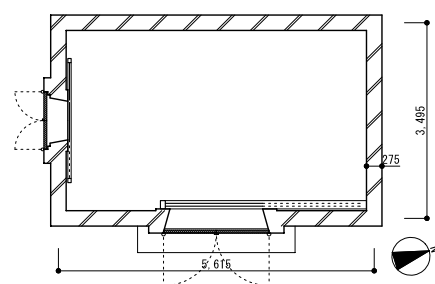


図2 小松酒店 サカグラ 平面図

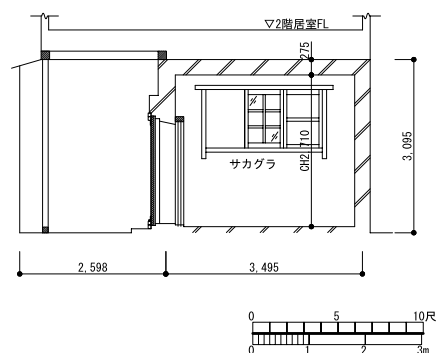


図3 小松酒店 サカグラ 梁行断面図



小松酒店
Matterport による撮影
全体象



小松酒店
Matterport による撮影
店舗



小松酒店
Matterport による撮影
2階6帖



小松酒店
店舗兼主屋 外観
北より



小松酒店
店舗兼主屋 店舗
北より



小松酒店
店舗兼主屋 2階座敷
東より



小松酒店
店舗兼主屋 2階6帖
東より



小松酒店
店舗兼主屋 2階6帖
東より



小松酒店
大黒像



小松酒店
サカグラ 外観
北東より



小松酒店
サカグラ 外観
南より



小松酒店
サカグラ 内部
南西より

機那サフラン酒本舗未整備建物整備促進のための民活事業スキーム調査研究

連携先：機那サフラン酒本舗保存を願う市民の会

受託期間：令和4年10月5日～令和5年3月31日

プロジェクト主査：渡邊 誠介（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：津村 泰範（建築・環境デザイン学科 准教授）

1. はじめに 一号蔵保存活用プロジェクト

2022年6月より、旧機那サフラン酒造「一号蔵」をモデルとして、民間事業主体による未整備建物の整備・活用の事業スキームを検討する意見交換会を、「機那サフラン本舗保存を願う市民の会」（以下「市民の会」と表記）のメンバーが中心となって始まった。この意見交換会は、その成果を市に提案することにより、今後の旧機那サフラン酒本舗の整備推進に資することを目的としている。

これは要するに市有施設の整備・活用を民間の事業主体が実施する場合の制度スキームの検討であるが、一号蔵単体での想定しうる再生・補修費用と当該建築規模で何らかの営業をもとに得られる利益では、収支バランスが短期的には取れそうもないと考えられ、現在他の先行事例で多く行われている指定管理制度を用いても事業者の選定が難しく、仮に選定された事業者がいたとしてもその団体が継続的にこの施設を管理運営することが難しいことが、意見交換会を通して共通認識となった。

加えて、所有者である長岡市から旧機那サフラン酒本舗全体をどのようなコンセプトで活用しようとしているかについて明確な方針が示されず、そのため一号蔵についても同様に明確な方針が決められておらず、やみくもに「市民の会」から改修・活用提案をしても、長岡市に聞き届けられる可能性は低いと考えられた。

2. 調査対象の選定

これまでの、建築に関しては長岡市の予算で改修設計・工事を実施し、その後、管理（運営）業務を行う業者を選定し委託するスキームで行ってきたが、それ以外の方式で行った事例の提示を市や関係者に示すことが、本調査研究業務となった。

情報収集により、上位制度の変容のまとめと可能性を大まかに整理すると管理委託や指定管理以外にすでにいくつかの手法が試みられている。

・民都機構による「出資」を通じたまちづくり支援

事例としては、「ONOMICHI U2」「タンガテーブルプロジェクト」などがある。ただ、出資要件が、①市町村が策定する「都市再生整備計画区域」内、②市町村が策定する「立地適正化計画の都市機能誘導区域」内、③都道府県が策定する「広域的地域活性化基盤整備計画の重点地区」内のいずれかに該当することであり、旧機那サフラン酒本舗の場合は、いずれにも該当しない。だがマネジメント型まちづくりファンド支援業務の可能性はあり、市所有の一般財産である機那サフラン酒本舗に適用

可能であるなら今後の展開も考えられるので非常に有効な制度だと思われる。ただし本制度の事例を考えると多分サフラン案件に想定される費用は高額であり、それを担保できるスキームになるのかどうかは不明である。

参考：（一社）民間都市開発推進機構「民都機構による『出資』を通じたまちづくり支援について」2017年

・2018(平成30)年改正文化財保護法を契機とした歴史的建造物活用と官民連携手法

旧機那サフラン酒本舗の各棟は国登録有形文化財（建造物）に登録されている。登録文化財はその活用を図るために指定文化財に比べ規制が厳しくないことも特徴の一つで、総数は現在10000件を超えているが、反して文化庁の予算は増えるどころか減る一方であることもまた事実であり、文化庁の国庫補助事業を財源として当てにすることはあまり期待できない。

2018(平成30)年6月に成立した改正文化財保護法が2019(平成31)年4月より施行された。新潟県でも2020(令和2)年3月に『新潟県文化財保存活用大綱』を定めている。過疎化・少子高齢化等を背景に、文化財の保存・継承が危ぶまれており、地域の宝である文化財を未来につなぐため、文化財の保存と活用の基本方針として策定したものである。

この大綱では、基本方針が以下のように示されている。

「日々の生活の中に文化財がある新潟」を目指し、文化財の把握から保存・活用を生み出すサイクルを構築します。

また、県の取組みとして、以下の2点があげられている。

・文化財を未来に継承する人材を育成します（文化財の継承者、県・市町村の専門人材）。

・景観とともに味わう文化財の活用を強化します。

このように、まちづくりや観光施設において文化財を活用することが可能になることを示している。効果として、市町村による「文化財保存活用地域計画」の作成を促進し、文化財を活用した地域振興や文化財の次世代への継承につなげることが期待されるが、長岡市ではまだ策定されていない。文化財保護法の改正は、市町村レベルでの民間団体との連携による文化財の保存・活用の推進を目的としたものである。文化財保護法に基づく文化財保存活用大綱・文化財保存活用地域計画・保存活用計画の策定等に関する指針も新たに2021(令和3)年6月に変更を加えられた形で示され、改正文化財保護法の施行を契機に、地域に点在する歴史的建造物

を保存、そして活用していくにはどのような手法が考えられ、それらはどのように進めていくべきであるかが課題である。

このことについて官民連携手法を採用した全国的事例を基に、その検討プロセスの構築を試みた三宅健士朗(みずほ総合研究所社会・公共アドバイザー一部研究員)の先行研究があるため、それをトレースする。この研究の中で、三宅は、下表のように歴史的建造物の官民連携手法を整理している。

表1 歴史的建造物の官民連携手法

譲渡(売却)方式(民法)
保存・活用等、一定の条件下で建物を譲り受けて事業を実施する事業者を選定し、建物を有償または無償で譲渡して所有権を移転し、事業者が保存・活用による民間事業を行う方式。敷地は譲渡・貸付ともに考えられる。
施設貸与方式(地方自治法、借地借家法)
対象建物に借地借家法に基づく賃借権を設定し、保存・活用等一定の条件下で建物を借り受けて事業を実施する事業者を選定し、所有権は公共が有したまま、事業者が建物を一定期間貸し付けて民間事業として保存・活用を行う方式。
公共施設等運営権制度(コンセッション方式)(PFI法)
利用料金を徴収する公共施設を対象とした手法である。当該建物の所有権を公共有したまま、PFI法に基づく公共施設等運営を行う民間事業者を選定し、運営権を売却することで、民間事業者が管理運営を行う方式。
指定管理者制度(地方自治法)
公の施設(行政財産)を対象とした手法である。建物の管理・運営を行う民間事業者を募集・選定したうえで地方自治法に基づく指定管理者に指定し、公共が定めた仕様に基づいて管理・運営を行う方式、事業者は利用料金の徴収が可能だが、収益事業と異なるため維持管理の対価として公的支出(指定管理料)が支払われることが一般的である。

※図版出典：みずほ総合研究所「WorkingPaper 改正文化財保護法を契機とした歴史的建造物の活用と官民連携手法について」2019年3月(みずほ総合研究所社会・公共アドバイザー一部研究員三宅 健士朗)

三宅は、上記分類の中での先行事例をいくつか提示しているが、①譲渡(売却)方式の例として、九段会館本館、横浜市現市庁舎、元立誠小学校跡地活用事業、旧達古袋小学校、②施設貸与方式の例として、旧関東財務局、旧小笠原邸、③公共施設等運営権制度(コンセッション方式)の例として、旧奈良監獄、旧荻田家住宅付属町屋群、④指定管理者制度の例として、吉野町煉瓦倉庫群(弘前れんが倉庫美術館)、グリーンハウス(旧藤沢カントリー倶楽部クラブハウス)、市村記念体育館を挙げている。なお、吉野町煉瓦倉庫群とグリーンハウスはRO(Rehabilitate Operate=改修・運営)型のPFI事業(公共事業を実施するための手法の一つで、民間の資金と経営能力・技術力を活用し、公共施設等の設計・

建設・改修・更新や維持管理・運営を行う公共事業の手法。Private-Finance-Initiativeの略)であり、PFI事業を実施するSPC(特別目的会社)が指定管理団体となっている。

上記事例の中で、「旧荻田家住宅付属町屋群」は、2013年に重要伝統的建造物保存地区に選定された岡山県津山市城東地区内にあり、江戸末期の町屋4棟で構成される重要文化財「旧荻田家住宅及び酒造場」の付属屋で、伝統的建造物(特定物件)に指定される。「旧荻田家住宅付属町屋群」の保存と更なる活用推進にあたって、施設改修を市の負担により実施した後、運営段階においてコンセッション方式を採用したものである。上述した多くの事例が近代建築の中でも非木造で比較的規模の大きいものが多いなかで、旧機那サフラン酒本舗に近い規模かつ江戸時代末期創建の木造であり、当該住宅群の所有権を市が所有したまま運営権を公募型プロポーザル方式で選定された事業者に売却することにより、民間ノウハウにより宿泊施設として独立採算による運営が行われている。これを参照事例として調査を試みる。

公共施設等運営権制度(コンセッション方式)成立の背景として、2011(平成23)年6月のPFI法改正がある。この方式は、利用料金を徴収する建物(公共施設)を対象に、その所有権を公共が有したまま、運営権を民間事業者に売却し、事業者自らのノウハウを活用して有効活用を図る方式のことで、事業者は自ら設備投資等を行って施設の資産価値を高めつつ、使用者からの利用料金収入によって独立採算で施設運営を想定するものである。民間事業者は所有権を持たないので資産保有にかかる租税公課が発生しないことがメリットである。

・文化財等の公的不動産を基幹施設としたエリア開発手法および事例

兵庫県朝来市は平成28(2016)年度に「文化財等の公的不動産を基幹施設としたエリア開発手法検討調査」を行い、同29(2017)年3月に報告書を刊行した。(一社)ノオトがまとめている。そして、この調査の目的は以下のとおりである(報告書をそのまま引用する)。

朝来市には、地域資産となる文化財等が多数存在しており、その一部は既に文化財としての保存措置を講じて公開施設等として活用されている。しかしながら、(地方に位置する自治体の一般的な傾向に漏れず、)厳しい財政状況のなか、今後、このような施設の維持管理費(指定管理料等)の持続的な確保は厳しい状況であり、ましてや新たな建造物の文化財指定は難しく、保存のための物件取得は、寄付であっても困難な状況にある。

※所属等はプロジェクト当時のもの

また、文化財指定・登録には至らない町屋、古民家等の歴史的建築物は、(これも他の自治体と同じように、)保存・活用の措置が講じられないまま、所有者の意向に任せられ、多くが空き家となり、放置されているのが現状である。結果として、庄屋や酒蔵、町屋、古民家など地域の重要な建築物が次々と取り壊されている。

一方で、近年は文化財等の活用価値が見直され、単なる史料館や公開施設といった活用ではなく、カフェ、レストラン、ブライダル等の収益施設としての活用も見られるようになってきた。政府が平成28年3月に策定した「明日の日本を支える観光ビジョン」のなかでも、文化財の本格的な活用の方向性が示されている。

本調査では、朝来市におけるこのような文化財等の状況や活用可能性を整理したうえで、当該文化財等の保存・活用とともに、当該文化財等を核とした官民連携によるエリア開発の手法について取りまとめるものである。

調査に際しては、①既に、朝来市が独自に官民連携手法を導入して平成25年11月に開業している「たけだ暮らしの交流館」(国登録有形文化財)、②現在、朝来市が官民連携による保存・活用を検討している「旧和田山機関庫」(文化財未指定・未登録)を事例として、具体的に検討を進めることとする。

(中略)

朝来市においては、上述のとおり、既に、先導的な官民連携手法で登録有形文化財である建築物の再生活用を行っている事例があるが、全国を見渡しても文化財等の活用やこれをエリア開発につなげる事業の実施事例は限られている。事業手法についても確立されたものは見当たらない。

このため、2章では、まず、文化財等を活用したエリア開発について、最新の知見を集約し、現時点における基礎理論として整理する。

次に、3章では、文化財等の公的不動産に適用できると考えられる官民連携手法について整理したうえで、4章では、その先行事例を選定し、調査分析する。

さらに、5章では、3章と4章で整理した公的不動産活用の官民連携手法を組み入れたエリア開発手法を、モデル地区にも適用しながら具体的に検討し、整理する。

最後に、6章では、地域の文化財等を活用したエリア開発を前提に、エリア開発に資すると思われる公的不動産の官民連携手法について取りまとめる。

この調査報告書の第3章で、現時点で、自治体が所有権や利用権を有する「文化財等」を保存・活用する官民連携手法を表2のように整理している。解説を引用すると以下のとおりである。

官設官営方式は、行政が自ら整備・運営を行う官の直営方式で、民間事業者の関与は管理運営業務の一部委託に留まる。

指定管理方式は、このうち管理運営の部分について、指定管理料をもって民間事業者に行わせる官設民営方式で、民間ノウハウの導入により、管理費の削減とサービス向上を図るものである。現在、自治体が所有する文化財等の保存・活用事業には、これらの手法が一般に用いられている。指定管理方式において、事業計画策定時点で官民対話を導入すれば、さらに、初期投資、管理運営費の抑制や施設の魅力向上が期待できる。全国的に実施事例は極めて少ないが、本調査で取り上げる「たけだ暮らし

しの交流館(旧木村酒造場EN)」がこの方式である。

DBO(Design Build Operate)方式は、民間事業者に設計・建設・維持管理・運営等を長期契約等により一括発注・性能発注する手法である。自治体が所有する文化財等の保存・活用事業においても、管理運営を行う民間事業者が自ら設計・建設工事を実施することで、初期投資、管理運営費の削減とサービス向上が期待できる有力な手法であると考えられる。ただし、現時点では実施事例は見当たらない。

コンセッション方式は、民間事業者がPFI事業の契約に基づいて、公共施設等の運営権を取得し、公共施設等の運営等の事業を長期的・包括的に行う手法である。資金調達も民間事業者が主体的に行うことが一般的で、民間事業者の自由度を大きくすることで、初期投資、管理運営費を大幅に削減できる。後述する「奈良少年刑務所」がこの方式で、かつ官民対話が導入された先進事例であり、ほかには実施事例は見当たらない。

BOT(Build Operate Transfer＝建設・運営・移転)は、民間が施設を建設・維持管理・運営し、契約期間終了後に公共へ所有権を移転する手法である。原理的には、民間が所有する文化財等を将来自治体に移管することを前提に、自治体が費用を負担する場合が想定できるが、実施事例はなく、今後も実現性は低いと考えられる。

表2 文化財の保存活用に関する官民連携手法

手法	官設官営方式	指定管理方式	DBO方式	PFI方式	
				コンセッション方式	BOT方式
事業の実施方針	■	■	■	■	■
施設所有権	■	■	■	■	○
事業計画 (官民対話の場合)	■	■ (○提案)	■ (○提案)	■ (○提案)	○
設計	■	■	■	(■負担金等) ○	(■負担金等) ○
施工	■	■	○	○	○
管理運営	■ ○一部委託	○指定管理	○委託	○運営権	○
民間の関与	小	小↗	中↗	大↗	最大
公共性の担保	大	大↘	中↘	小↗	最小
初期投資抑制効果	—	—↗	中↗	大↗	最大
管理費抑制効果	—	中↗	大↗	大↗	最大

※凡例：■官 ○民

※矢印は、事業計画を(○提案)した場合の変化を示す。(凡例：↗増大 →横這 ↘低下)

また、第6章で、エリア開発を見据えた「基幹施設整備の官民連携手法」として表3のとおりとなる。解説を引用すると以下のとおりである。

「文化財等の公的不動産」を行政財産として活用する場合は、「指定管理方式」「DBO方式」「コンセッション方式」の3方式が考えられる。このうち、指定管理方式とDBO方式は「官」が資金調達するスキームであり、官設民営の場合に採用されるのが一般的である。設計・施工を「民」に委託することに問題がなければDBO方式が優れている。

これに対して、コンセッション方式(運営権付与)は「民」が資金調達するスキームであり、「民」の自由度が高まる分、「官」の初期投資、管理費を低く抑えることができる。同等のスキームとして、「文化財等の公的不動産」を普通財産として活用する「都市公園方式」「定期借家

※所属等はプロジェクト当時のもの

方式」が考えられる。※定期借家方式は、普通財産として活用する手法として有効と考えられる。

事業期間の設定は、「民」の初期投資額に依るところが大きい。初期投資を伴わない官設民営のスキーム(指定管理方式等)であれば、指定管理期間は5年程度とし、指定管理期間中に特段の問題がなければ、順次指定管理契約を更新する方法が考えられる。

逆に、多額の初期投資が発生するコンセッション方式等の場合は、事業期間を20年～30年程度として、安定的、持続的な経営環境を担保する必要がある。ただし、「民」の経営が行き詰まった場合や事業目的が達成されない場合に備えて、事業評価の実施や中途解約の条項を定めることが考えられる。

表3 基幹施設整備の官民連携手法

手法	官設官営方式	DBO方式	コンセッション方式	都市公園方式	定期借家方式
エリア開発計画	■○官民対話				
ピークル組成	○	○	○	○	○
事業の実施方針	■	■	■	—	—
施設所有権	■行政財産	■行政財産	■行政財産	■普通財産	■普通財産
事業計画	■○官民対話				
資金調達	■	■	○	○	○
設計・施工	■	○	○	○	○
管理運営	○指定管理	○委託	○運営権	○許可	○定借
民間の関与	中	中	大	大	大
公共性の担保	中	中	中	小	小
初期投資抑制効果	小	中	大	大	大
管理費抑制効果	中	中	大	大	大

※凡例：■官 ○民

以上を踏まえ、行政所有の歴史的建造物の再生及び運営を行っている(原資は残念ながら行政中心)案件の現地調査として、以下の二か所を選定した。

- 1) 岡山県津山市「旧荻田家付属町屋群(国選定重伝建地区特定物件)」→「城下小宿 粋や」(PFI事業コンセッション方式)
- 2) 兵庫県朝来市「旧木村酒造場(国登録有形文化財)」→「竹田城城下町ホテルEN」+「暮らし交流館」(サウンディング方式からの指定管理制度)

上記の事例は、歴史的建造物の再生にあたり建築基準法適応除外の制度と組み合わせることで、廉価でもむしろ味のある建築になる点に注目し、改修計画と活用計画が統合されているが故に実施可能だったと考えられるものである。それが今回の検討課題である「市有施設の整備・活用を民間事業主体が実施する場合の制度スキーム」の回答の一つであると考えられる。高い安全性確保を前提とした長岡市による整備(修理)工事の設計とその後の指定管理者による管理運営と

いうスキームでは、管理運営の考え方との連続性がないばかりか、管理運営者が誰になってもいいようにフル装備を前提とする整備(修理)設計がなされ高価な工事になり、入札不調になりやすい。

トータルの整備目標(例えば、地域の若者が発酵に関わるプロジェクトを産み出す可能性をクリエイトする空間の準備、等)を長岡市が明示することで、指定管理であれコンセッションであれ、なんらかの方針が生まれるはずであろう。

3. 現地調査

1) 岡山県津山市「旧荻田家付属町屋群(国選定重伝建地区特定物件)」



図1 旧荻田家付属町屋群を活用した施設の管理運営事業
https://www8.cao.go.jp/pfi/pfi_jouhou/jireishuu/pdf/782.pdf

2023(令和5)年1月28～29日にかけて訪れた。残念ながら「城下小宿 粋や」は個人では宿泊できず、同伝建地区内の町屋を改修した「美都津山庵」に宿泊した。運営をしている「ザ・シロヤマテラス津山別邸」を訪ね、竹内慎副支配人よりパンフレットを入手した。

また、2020(令和2)年7月17日に開業する直前の改修工事の完成見学資料もいただいた。

具体的な工事内容は津山市の担当者(産業文化部歴史まちづくり推進室)が詳しいとのことだ。

このホテル「ザ・シロヤマテラス津山別邸」も2019年2月

※所属等はプロジェクト当時のもの

27日の開業で、運営会社はホテルニューアワジ(兵庫県洲本市)である。1974年に開業した津山国際ホテルが老朽化したため移設・新築したホテルで、地上9階建て地下1階、延床面積は約8,200㎡で、客室数65。会議・宴会場、地元食材を集めたマルシェとともに「国際スクエアガーデン」として一体開発されたものだそう。地元の経営者らでつくる「新津山国際ホテル建設協議会」と共同で計約30億円を投じて建設された。JR津山線津山駅から徒歩7分、中国道の津山インターチェンジから車で10分の立地で、桜の名所・津山城(鶴山公園)と隣接している。ニューアワジグループのホテルは淡路島を中心に四国、神戸、京都に広がり、シロヤマテラスは15館目だそうだ。

津山市は近世城下町であり、城跡を含めてその名残をとどめる。市内には、重伝建地区が二か所あり、そのうちの東側が先に選定された地区であり、その中に対象施設がある。旧出雲街道沿い東西約800mの距離に、間口が広く奥行きが長い敷地割の接道している正面に店構えを備えた商家が立ち並ぶ。江戸時代末期から明治・大正昭和初期に建てられた木造瓦葺切妻造平入で二階もしくは厨子二階建ての建築群である。



写真1 城東地区の街並み 写真2 重文旧荻田家住宅正面外観

旧荻田家住宅は保存地区西部に位置する大規模な町家で、酒造業を営んでいた。現存する建物のうち、主屋の建築年代は1790(寛政2)年頃と考えられている。重要文化財に指定されているが、内部見学不可となっている。

「城下小宿 粋や」の位置は、重伝建地区の西寄りにある。一棟貸しの宿泊施設であるが、4棟で構成されており、背後の駐車スペースを入ると下図の青色で示した範囲が施設の範囲であろう。



写真3 航空写真より「城下小宿 粋や」の敷地境界(推定)(Googleマップの該当箇所を一部加工)

利用客は、受付を「ザ・シロヤマテラス津山別邸」で行い、電子キーで番号を入力する遠隔管理で夜間は基本的には管理者は常駐



写真4 正面

写真5 電子錠詳細

このように人件費のコストダウンも図っていると思われる。正面の建具は電子錠仕様にするためか新規の木製格子戸に取り換えられているが、色調をあえて古色に合わせていない。

「城下小宿 粋や」の施設概要を改めてまとめる。津山市が施設を所有し、運営権をHNA津山に設定したコンセッション方式による町家ホテルである。江戸後期に建てられた「旧荻田家付属町家群」をリノベーションし、地域の観光拠点としたもので、公共施設等運営権対価(運営権の存続期間全体の支払い額)は7405万円。事業期間は2040年3月31日までである。宿泊施設は、重要伝統的建造物群保存地区である城東地区内にある。江戸時代に酒造で栄えた旧荻田家の住宅に連なる町家4棟を活用した。旧荻田家住宅は国の重要文化財に指定されており、今回の町家群も4棟すべてが伝統的建造物(特定物件)に指定されている。旧荻田家住宅から約60メートルにわたって続く軒庇が地区の景観の特徴だ。「粋や」という宿名は、酒の原料である米と津山の桜の花のイメージを重ね合わせたもの。木造2階建て瓦葺きの町家4棟を宿泊棟3棟、ラウンジ1棟にリノベーションし、1棟貸しのホテルとして1日限定3組の宿泊客を迎える。各棟それぞれにキッチンやヒノキ風呂、プライベートな庭に縁側風のテラスをしつらえた。

宿泊客は、日本酒を湯船に注ぐ「日本酒風呂」が体験できるほか、HNA津山が市内で運営するホテル「ザ・シロヤマテラス津山別邸」の温泉大浴場を無料で利用できる。また、城東地区内の飲食店での朝食やデリバリー(ルームサービス)、ザ・シロヤマテラス津山別邸での夕食を組み合わせた宿泊プランも用意している。シロヤマテラスまでは車で5分の距離といい、送迎サービスも行っている。料金は2名利用、朝食付きの場合で大人1人当たり1万6900円(サービス料・税別)から。A棟は屋外を含めて約220㎡の広さで、定員は8

※所属等はプロジェクト当時のもの

人。B棟は約123㎡で定員11人。C棟は約134㎡で定員6人。ラウンジ棟ではフリードリンクを提供し、津山にゆかりのある書籍を集めたミニライブラリーを設置する。

スキームの詳細については、日経BP社のサイト「新・公民連携最前線」のコラム「自治体PPP担当者と語り合う！」第2回「2件の「小規模コンセッション」が生まれた背景、津山市 手法ありきでなく、まずは運営事業者の声を聴くことから」に詳しい。全国各地の自治体でプロジェクト構築支援を行う寺沢弘樹氏(まちみらい代表社員)が、津山市総務部財産活用課FM推進係参事兼係長を務める川口義洋氏に話を聞いた内容である。以下にその抜粋転載する。

2016年に「公共施設白書」を作成・公表するなど、これまでも津山市はファシリティ・マネジメント(FM)をかなり本格的にがんばって推進していた。公共施設の適正化は使命感を持ってやらなくては行けないが、施設を「再編する」「なくす」「廃止する」というのは辛いこともたくさんある。そんなときに、PPPの「一緒に稼ぐ」とか「公民連携で収益を上げていく」みたいな要素をFMと連動できたら「これはめっちゃめっちゃパワーあるな」と思った。そんなときに新しい市長(現職の谷口圭三市長)に変わって、指定管理者制度で進める予定だった旧荻田家付属町家群を活用した施設の管理運営事業を再検討することになった。旧荻田家付属町家群を活用した施設の管理運営事業は、運営権をホテルニューアワジ(兵庫県洲本市)のグループ会社、HNA津山(津山市)に設定。2020(令和2)年7月15日に開業した。

制度をつくった国としても、コンセッションを使うのは空港や水道などもっと巨大なプロジェクトを想定していたはずで、しかも、運営権対価を「最初、ゼロ円でいいです」(2023年3月末日まで無償)とするスキームも普通はやらない。田川市(福岡県)で小規模施設におけるコンセッションの活用例はあったが、500㎡規模の伝統的建造物をコンセッションで整備するという事で注目を集めた。

ただ、はじめからコンセッションありきで再検討を始めたわけではない。手法を選択する中で、これを選んだら今までの悩みがスッと解消できるかも、という感覚だった。例えば「箱をつくって(運営事業者)に渡す、というスキームを変えたい」「事業者さんと一緒になって考えたい」といったことがまずあった。これを実現するには、一般的な指定管理期間である5年間で短すぎる。もっと、超長期に民間事業者に預けて、できるだけ自由にいろんなことをしてもらえようという手法が

いい。そうした中で、コンセッションに着目した。最初は「コンセッションなんて無理、無理」という反応もあったが、だんだんと「これを使えばできそうだ」ということが見えてきた。

事業のビジョンがしっかりしていないのに、PFI、DBO、リース……といった手法を抽出して、◎、○、×みたいに事業手法を選択してしまうと、そのプロジェクトから描ける未来の姿がものすごく限定されてしまう。だから、気をつけて進めないで国の「PPP/PFI優先的検討指針」は、そうになってしまう危険性がある。

旧荻田家付属町家群^{かん}を活用した施設の管理運営事業を指定管理とコンセッションで進めた場合の違い(運営権対価は2023年3月末日まで無償)。事業を見直したことで民間事業者との関わり方が大きく変わった。

2018年2月に新市長が当選し、既に実施設計も進んでいて指定管理者による運営が決まっていた事業にストップがかかり、そこからすぐ、7月にはサウンディング型市場調査を実施。さらに翌年1月にコンセッションの公募を開始、3月に事業者を決定した。



図2 旧荻田家付属町家群を活用した施設の事業スキーム変遷
<https://project.nikkeibp.co.jp/atclppp/072500037/091500004/>

コンセッションで進めていくことが決まってからは、特に「とにかくできるだけ早く進めなくては」という意識で作業に取り掛かった。運営事業者が使いたいような空間にするために内装などをアレンジできるタイミングで参画できるようにしたかった。実施設計に基づく工事の開始時期(2018年12月)は決まっていたので、内装が出来上ってしまう頃ではなくて、もっと早い時期に運営事業者を決めなくてはならなかった。

設計・施工・運営がセットになるPFIやDBO(Design Build Operate)などの場合、従来は設計と施工(ゼネコン)が強く、運営はそのオプションでついてくるといったイ

※所属等はプロジェクト当時のもの

メージが強かった。そうではなく、運営事業者を先行決定する。そして、その運営事業者の知見やノウハウを、設計や工事にフィードバックさせていくという運営重視のプロセスが、PPPを進めていく上ではとても大事だ。これからは「やっぱりオペレーターでしょう」という発想に変わっていくと思う。今回のプロジェクトはその契機の一つになる。

「糶や」の事業では、設計前の段階から運営事業者を決めるとまではいかなかったが、途中から短期間で方向転換した結果、運営事業者の意向もかなり反映できた。「運営事業者の先行決定」というやり方は、ほかの自治体でも参考にしていってほしい。このプロジェクトは、当初は施工を終えてから指定管理者に施設を引き渡す計画だった。それが方針転換して、施工の途中から運営事業者が参画することになった。これによって、まったく違うグレードの施設になった。同じ施設で手法の違いを比較することで、運営者の重要性を分かりやすく示している例だといえる。

初めてコンセッションに取り組んでみて、苦労はあったのだが、「これは無理」みたいなことは、そんなにはなかった。それというのも、今まで、他の事業も全部コンサルティング会社に仕事を頼んだことがない。とにかく自分たちで考えるというのが常日頃のことになっているので、不安要素としては「前例がない」という部分だけだった。でも「だからできない」ということにはならない。今になって募集要項を読み返してみると「めっちゃめっちゃ素人臭いなあ」と思うが。

運営事業者を先に決めて進めていくことで、市役所の業務負担が増えたりとか、大変になったりとかは、施工段階ではあった。事業者は自分たちの好きな内装を求めて、しかもそれが日々変化していくわけで、現場の担当者はめっちゃめっちゃ大変だった。「ここはフローリングやめてカーペットにしたい」とか、「ここに照明を追加したい」といった話がポツと出てきたりすると、市の担当者は、現場サイドの「そんなの今さらできるわけないだろ」とか「対応した場合は(工事費を)増額してくれるのか」といった声を聞いて調整しながら進めていくことになる。一般的な公共施設の場合だと、入札する時点で仕様が決まっているのでほとんどこういったことは起こらないので相当大変だったと思う。

「事業者が施設を創造的にリノベーションできて、なおかつ、運営をしっかりと行えるやり方って何だろう？」という前提で手法を探っていった。なおかつ、民間事業者のスピード感に沿って事業を進めたい。それを踏まえると、できるだけ行政が前に立たずに、後ろで支えることができる仕組みが一

番いい。そこからROとコンセッションを組み合わせる手法に決まっていた。

行政の施設整備の計画って「イニシャルで掛かる費用は誰かが用意してくれる」みたいなに考えているとしか思えないようなものが多い。そうではなく、イニシャルをちゃんと必死に調達しようとしたから、クリエイティブな方法論が初めて見えてきたんだろうと思う。

サウンディング型市場調査で民間事業者の意見を聞いてから、市の考え方が完全に逆転して行った。市は元々、「糶や」の事業では、それこそ素泊まりで1人何千円ベースの施設を考えていた。そうしたら「いやいや、何でそんな、自分たちで自分たちの価値下げなのか」「あんな本物(の伝統建築)は、ほかになかなかないから」「自分たちだった、一泊何万円という設定にする」と民間事業者さんから言われて、そんなに価値があったのかと驚いた。実際、「糶や」では1泊2食付きで3万円以上という料金設定のコースがつくられている。「ここで意見を聞いた事業者さんたちに実際に使ってもらうためにはどういう制度設計が一番いいんだろう」というところから考えて、RO+コンセッションという手法にたどり着いた。津山市ではこれまで、サウンディングといってもファックスとメールによる民間からの意見聴取しかやることがなかった。この時が初めて、事業者の人たちが「自分たちはこうしたい」というのを聞くために行った初めてのサウンディングということになる。

当時、財産活用課は財政部にあったが、その時の定久(誠)課長を中心に「ちゃんとしっかりやらないと!」ということに進めていった。見直しになった事業の成否がかかっているわけで、これが結果に結びついたのはとてもよかったと思う。

サウンディングには市側の思惑もあった。公募をするときに、出来レースになってはいけなし、そう見られてしまうのもよくないので、サウンディングの実施を通じていろいろなところに声を掛けたい、というのがまず一つ。そしてもう一つは、地元企業への説明だ。「民業圧迫ではないか」「何で市がホテル業をやらなきゃいけないんだ」といった声もあったからだ。そこで、自分たちがやろうとしていることをきちんと伝えるために、サウンディングという場に来ていただいて「こちらは自分たちはこういうことをやろうとしています。どう思われますか。もちろん参画していただくのは歓迎します」といった説明をする一方で、相手からは率直な意見を聞きいたりもした。結果として、「津山市がやろうとしているビジネスは、我々とはターゲットが違うみたいだ」ということ

を分かっていただけで、それで雪解けできたという面もあったと思う。

これは行政による従来型の「説明会」とはまったく毛色の違うものだ。説明会というのは、どうしても行政から一方的に「私たちはこういうことをします。OKしてください」ということを伝える場になってしまう。これに対してサウンディングは、「こういうことしたいんだけど、一緒にやりませんか」という対話だ。相手側も、行政に文句言うだけでは済まない。ビジネスとして応じられるか応じられないかという判断を迫られるわけだ。

そうすると、「これは自分たちには無理」ということが身に染みて分かる地元事業者の方もいるだろうし、一方で、これはチャンスだと感じた地元事業者の方は勝負をかけることもできる。ここがこれまでの「説明会」とは大きく違うところだ。

地元事業者の皆さんも行政と対立しているわけではなくて、みんなで津山というまちを盛り上げていきたいと考えている。津山に人が入ってきて、消費が増えて、経済を回す。そのことについては基本、同じ方向を見ているからだ。

今回はサウンディングを通じて、「棲み分けができるんだったら、それはそれで進めてくれればいい」ということで、しっかり納得していただくことができた。その点でも、サウンディングをやって良かった。

PPP の魅力はネットワークが多様化して、地元の人たちと創造的な取り組みができることにある。今まで通りの行政の仕事をやっていたら多分つながらないような人たちと、いろいろプロジェクトでつながっていく。そして、つながった人同士が結びつくような関係性もできる。それまでは、民間事業者といっても指名業者や外郭団体しかつながりがなかったが、PPP で面白いプロジェクトやっていこうとして見渡してみると、いままで知らなかっただけで地元にはすごい人がたくさんいた。そんな人たちと知り合って、創造的なプロジェクトを進めていけることが、一番の魅力だと思っている。

実際に宿泊できなかったのも、改めて技術的・空間意匠的にどう解いたのかは改めて体験的に調査をしたい。

2)兵庫県朝来市「旧木村酒造場(国登録有形文化財)」

2023(令和5)年3月12～13日にかけて訪れた。朝来市は2005(平成17)年に、朝来郡生野町・和田山町・山東町・朝来町が合併して発足した、兵庫県の北中部に位置する市である。山陰地方である但馬と神戸市などの京阪神方面の間に

位置し、兵庫県内で交通の要衝である。また、「日本のマチュピチュ」と称される竹田城がある。

その麓にある JR 播但線竹田駅周辺の旧市街地にあるのが、旧木村酒造場であり、店舗兼母屋・米蔵・舟蔵・貯蔵所・裏門・門及び堀の6棟からなる。2013(平成25)年に「竹田城下町 旧木村酒造場 EN(えん)」として、店舗兼母屋はホテル、米蔵は店舗、舟蔵はレストラン、貯蔵所は観光案内所と竹田城跡に関する情報館として整備再生され、竹田のまちづくりの拠点施設、また地域の魅力と活用を創出する施設として運営されている。写真6の青線で囲った範囲が旧木村酒造所の範囲である。

この旧木村酒造場は、寛永2(1625)年頃から竹田で酒造りをはじめ、度重なる火災から復興を遂げ、現在の建物は明治35(1902)年から36(03)年頃、再建されたといわれている。外観は、うだつをはじめとした地区の景観を特徴づける意匠や様式・構造が改変されることなく残存し、いまでも地域の景観形成の模範として貢献している。内部には酒造の設備や、祭礼・年中行事の設えとともに、前述の家人と家財を守る防災の工夫が施されていることから、地域の歴史風土と文化を伝承する貴重な建造物群といえ、整備後の2015(平成27)年11月に登録文化財に登録された。

ホテル EN に宿泊し、内部も調査した。写真6の赤い範囲を加えたのがホテルの範囲で、旧木村酒造場の周辺の町家も含めて分散型ホテルとなっている。運営はバリューマネジメント株式会社で VMG HOTELS & UNIQUE VENUES のひとつである。平田直樹支配人に、ここのスキームについてお話を伺った。



写真6 航空写真より「竹田城城下町ホテル EN」の範囲
(Google マップの該当箇所を一部加工)

朝来市所有の建造物を5年の指定管理でバリューマネジメント株式会社が運営しているが、オープンして10年近く経つ中で、建物の修理などは基本的に朝来市観光振興課で行うが、一定金額以下の小修理は運営会社の方で行うそうだ。運

※所属等はプロジェクト当時のもの

営会社は、もともとはウェディング事業をやっていた会社だったそうだ。いろんな宿泊客がいるそうだが、チェックインの際にいただく説明書きとともに改めて諸注意をいただき、理解をしていただいているので、大きく手を入れた仕上がりでなくとも、宿泊客はむしろ非日常のゆったりとした時間を過ごすことができるという。基本的な考え方は一般社団法人ノオトに寄るところが大きく、ノオトと朝来市との関係でできたスキームのようだ。

全6棟13室を、可能な限り“そのまま”にリノベートしている。また一棟貸切タイプのペットと泊まれる客室もある。レストランは、元は発酵蔵をそのまま使用したもので、宿泊する棟とは別である。ロフト的な2階を設け自由に出入りできるラウンジとしている。



写真7 寝室

写真8 客室土間

写真9 食堂

あまり手を加えないデザインとは言え、設備のグレードは高く、スプリンクラー設備を入れることで、防火構造としない工夫など、まずは現行法規内で上手に解こうとしていると感じた。

レストランは蔵の構造を活かし、手の加え方はミニマムで心地よい。補強のシンプルさはさりげなく秀逸。

最後にこのスキームを含めて説明しているノオトの「歴史的資源を活用した観光まちづくり」(2019年1月)が提示された文化庁のURLを以下に示す。参照されたい。

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/pdf/r1414902_04.pdf

4. おわりに

ふたつの事例とも公有資産を如何に民間のアイデアを入れながら有効活用するかという前提で、公有歴史的建造物の管理運営を民間に任せていると言ってよい。単に津村が行って体験してきただけの内容で、まだまだ調査不足はあるものの、他の事例も含め、もっと深掘りしたうえで応用可能かのシミュレーションは可能だと言える。ただ、少なくともこうした考え方の共有が官民連携でできていることが大前提にあると思う。

文化庁の施策でも文化施設のコンセッション導入促進事業

が令和5年度についに登場した。

コンセッションPFI方式と民都機構のマネジメント型まちづくりファンド支援業務を掛け合わせたスキームの開発を視野に入れ、こうした方法の導入を検討してみることは有効だと言えよう。

令和 4 年度（2022 年度）指定文化財等基本調査事業に係る建造物調査業務委託

連携先：柏崎市

実施期間：令和 4(2022) 年 9 月 21 日～令和 4(2022) 年 3 月 31 日

プロジェクト主査：平山 育男（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：津村 泰範（建築・環境デザイン学科 准教授）、西澤 哉子

1. はじめに

柏崎市西山町石地に柏崎市指定記念物史跡である明治天皇行在所・明治天皇駐蹕碑・長屋門が所在する。この明治天皇行在所等は、これまで「久寛荘」と呼ばれる施設であった。

久寛荘は、これまで群馬県の高野藤岡広域市町村圏振興整備組合の施設として夏期における臨海学校などにおいて利用されてきたものである。しかし、新型コロナウイルス蔓延による影響、施設の老朽化などに伴い、この施設が令和 3(2021) 年 3 月末をもって閉鎖され、事業が廃止されるに至った^{注1)}。そのため、施設は令和 4(2022) 年 8 月に至り競売に付されることとなった^{注2)}。

それに先立ち、柏崎市から長岡造形大学に対し、歴史的建造物部分について建築調査の依頼があり、令和 4(2022) 年に当該建物の建築調査を実施した。調査においては平面図、痕跡図、復原平面図などの作成、写真撮影、聞き取り調査などを行った。本稿においては、調査の結果あきらかとなった建築年代などについて報告するものである。

2. 久寛荘の概要

久寛荘は、柏崎市西山町石地 863 番地に立地するもので、日本海に並行して走る国道 352 号の西側、すぐ目の前に日本海を一望できる敷地となる。

久寛荘は、内藤久寛の生家である。内藤家は石地の旧家で回船業を営み、久寛は安政 6(1859) 年に生まれた。久寛は戸長、県議会議員、衆議院議員、貴族院議員を務めるとともに、明治 21(1888) 年には山口権三郎らとともに日本石油会社を興し、当地における鉄道敷設にも尽力し、昭和 20(1945) 年に 85 才で没した^{注3)}。

建物は昭和 55(1980) 年から群馬県の高野藤岡広域圏臨海学校施設として使われていた。

なお、施設は明治天皇行在所^{注4)}・明治天皇駐蹕碑・長屋門として昭和 44(1969) 年 9 月 1 日に柏崎市指定記念物史跡とされた。

3. 久寛荘の位置と概要

・位置と概要

久寛荘の敷地は、国道 352 号の西側で東面する。台形となる敷地の間口は 60 m 程、奥行も 60 m 程となる。敷地の西側、国道に面しては長屋門が配され、これを入り本館行在所、本館広間、本館行在所西側に土蔵、海に面して新館が配

される。このうち、新館を除く、長屋門、本館行在所、本館広間、土蔵が歴史的建造物であり、今回の調査対象となる。

なお、久寛荘はもともと内藤久寛の生家であるが、本館行在所は明治 11(1878) 年 9 月 14 日における明治天皇北陸巡行に際して、天皇の休憩、昼食のために使われたものである。

4. 久寛荘建物の概要

・配置と形式、規模

長屋門は、国道に面して西面して建つ。建物は木造で、屋根は入母屋造の棧瓦葺となる。規模は間口となる梁行が 16 間で 29.9 m、桁行 3 間の 5.7 m となる。本館行在所は、木造一部二階建てで、1 階の北側の長屋門との供用部分は入母屋造、2 階部分は切妻造で、いずれも棧瓦葺とする。規模は間口となる梁行 11.0 m 程、奥行となる桁行が 22.6 m 程となる。

本館広間は、木造平屋切妻造平入、棧瓦葺となる。規模は間口となる桁行が 9 間で 16.6 m、梁行が 5 間の 9.1 m 程である。建物は本屋周囲に半間規模程度の下屋が廊下として 4 周に取り付き、南面西端に玄関が取り付け形式と見ることができる。

土蔵は土蔵造総 2 階建てで、周囲に鞘となる覆屋を設け、北側に蔵前としての空間を設ける構成となる。規模は間口となる梁行が 2 間半間で 4.5 m 程、奥行となる桁行が 7 間の 12.4 m 程である。覆屋は土蔵正面となる北側に 2 間程の蔵前を設けるため、全体としての規模は間口となる梁行が 3 間半で 6.4 m 程、奥行となる桁行が 9 間半の 17.2 m 程となる。

・平面

長屋門は全体が 30 m 程となる長大なもので、中央部分が門となり、東側となる向かって右手が物置と土蔵を改造した冷蔵庫、西側となる向かって左手が本館行在所背面の諸室が組み込まれた平面の形式となる。門部分は三間一戸の形式となる。全体の間口は 5.9 m で、中央が 2 枚扉の門扉で、間口 2.9 m となる。扉の向かって右側は板壁で、扉の向かって左側に潜り戸を設け、更に向かって左側に 2 帖広さの門番所を設ける。そのため門扉の内側は間口 7.6 m となりやや広いものとなる。門部分東側は門寄りの 4 間が物置で、入口は背面東より引違の硝子戸、正面側にも 1 間半の間口となる開口部を設ける。建物内部は一部が、近年の工事で間仕切られている。残り 3 間は現在、物置側から入る冷蔵庫として改造がなされている。内部は未見であるが、小屋裏から観察すると

間口3間、奥行3間の土蔵が長屋門に内蔵される形式となる。土蔵は切妻造妻入の形式となる。門部分西側は、本館行在所の背面部分が貫入した平面となっている。門寄りの2間は10帖の和室で現在は蒲団部屋として使われ、北側の1間が「行在所」の床の間、棚となる。西端の2間は南側が4帖の物置、北側が8帖の和室となる。なお、この西側に本館行在所の廊下、便所が接続する。

本館行在所は、本館行在所の建物は原則東西に並ぶ2の部屋列から構成されている。建物の入口は長屋門の西側に設けられた門から入り、建物西側中程に設けられた玄関から入るが、「行在所」には長屋門から入り、西側に折れ庭側から直接入ることができる。長屋門との供用部分は門番所西が10帖、その下手に南から4帖と8帖がある。この北側に整形で配される4室が行幸に用いられた。南東の10帖が「行在所」で、奥の床の間が長屋門に貫入し、部屋の東側に式台が設けられる。「行在所」下手が10帖「梅乃間」、「行在所」の表側が10帖「竹乃間」で上手に2帖の旧仏間、3帖の物置を配する。竹乃間の下手が10帖「松乃間」で、この下手に建物として玄関を配する。また、梅乃間下手に廊下を通し、突き当たりが流しで便所が設けられる。竹乃間、松乃間の北側に4尺幅の廊下と階段を挟み、表側が10帖「朝顔の間」、下手が10帖、廊下を挟み玄関脇に8帖を配する。更に下手に洋間の応接室、階段、廊下があり、これらの以北に便所、配膳室、風呂を設ける。竹乃間、松乃間以北が2階建となる。南側から東に廊下を設け上手が8帖の「ジョウダンノマ」、下手が10帖和室、廊下と階段を挟み上手が10帖「トモノマ」、下手が和室6帖、廊下と階段を挟み、3帖の旧女中室、4帖の和室、かつて子ども部屋として用いた6帖の和室2室で、北西端に便所、流しをはいする。

本館広間は玄関から入るが、建物西側が本館行在所に接続する。玄関は間口2間で奥行1間弱の叩き土間があり板の間となる。この奥が10帖で、奥に間口1間半の床の間が東側に寄って取り付く。この10帖の下手に15帖、10帖で裏側に床の間が配され、5帖が取り付け、全体では4室続きで合計40帖の広間となる。この4周に廊下が取り付くが庭に面する南及び東面は前面がガラス戸となる。背面の北側は一部に窓を設け、西側は窓を配する。

土蔵は覆屋東面北端間に本館行在所から間口1間半の渡り廊下が接続する。土蔵は北面のやや東側によって入口が設けられる。扉は土戸の開き戸とともに、土戸、板戸、網戸の引き戸を装置する。1階は1室で入口西側に階段を配する。2

階も1室で北側中央西寄り及び西面南寄りに窓を設ける。

・構造形式など

長屋門は基礎を切石礎石として、柱を立てる。門部分は切石敷で、門扉両側に立つ柱はごひらの断面で見付12.5寸程、奥行9寸程で、両端の柱は7.5寸弱角となる。また、長屋門背面筋にも見付12.0寸弱程、奥行10寸程となるごひらの柱を立て、扉背面で石畳敷となる一面を囲繞する。門東側は門寄りとなる南西角の柱が10寸角程、南東角が8寸角程でいずれも銅板を被せる。門西側は「行在所」南側角となる柱は5.5寸弱角となり東側よりは、細いものの居室としては木太い印象を受ける。道路側は隅柱を除き大壁とし、腰部分は簷子下見板張とする。小屋組は原則的として前後の桁間に先端がせがい梁となる小屋梁をかけ渡し、敷梁を2通り配するもので、この上に2重となる小屋梁を掛けて、棟木の両側に母屋3本を配し、垂木を掛け渡す構成となる。但し、東側の土蔵上部分では東端から1間目ではせがい梁内側を土蔵の土屋根に直接置き、この間に湾曲した梁をかけ渡し、これが隅木と土蔵上の敷梁を受ける構成となる。東端から2間目ではせがい梁内側が小屋内で屈曲し、投げ掛け梁となり、元口はこの敷梁が受ける。

本館行在所において、基礎は切石礎石として、これに柱を立てる。軸組では長屋門との供用部分が6.5寸角と太いが、「行在所」の床柱はごひらとして見付を木細くする。これ以外の各部屋4隅の柱は4.5寸角程とする。和室の各室は内法に内法長押を廻し天井は棹縁天井とする。小屋組は「行在所」と梅乃間が和小屋組で2重梁として、梁は先端がせがい梁となる。中央に棟束を配して棟木を掛け、その両脇の半間間隔で母屋を配し、垂木を掛ける。2階部分の小屋組は未見である。本館広間において、基礎は切石礎石として、これに柱を立てる。軸組の柱は4寸角程で、外周の下屋は3.3寸弱角程となる。各室の内法は内法長押で固める。小屋組は未見である。土蔵において柱は2尺弱と細かい間隔で立てる。柱幅は梁の掛かる箇所が5寸弱角、2尺弱の間隔で4.5寸弱角の柱を立て、この間に4寸弱の幅となる柱様の材を配する。2階床組は、階段部分を除き、基本的には2尺間隔となる柱材間に梁を渡す。小屋組は2間程の間隔で配される太い柱間3箇所梁を渡し、妻面は中央の柱が直接に地棟を受ける。母屋は用いず、垂木は3尺程の間隔で配される。

5. 久寛荘建物の建築年代及び復原考察

・建築年代

長屋門の建築年代については『西山町の民俗と文化財』によれば

長屋門 元治元年内藤家で、領主長岡牧野侯の許しを得て建てた門である。この門は万延元年十一月八日、内藤家は火事で殆ど焼けたことがあったが、この門の一枚だけが焼け残った。それを元治元年四月二日、焼け残りの一枚の扉をもとに、昔の長屋門を復元したのである。^{注5)}とある。この記載によれば、当初における長屋門の建築年は明らかではないが、長屋門は元治元(1860)年に火災に遭って門扉一枚が残り、これに基づき、万延元(1864)年になって現在の長屋門を旧規に倣って建築したこととなる。実見すると建物は和釘を用いて建築がなされていることなどから、上記の伝承は正しいものと判断することができる。なお、門扉は東側で風蝕が進みやや傷んでいるようである。上記引用の記載が正しいとすれば、東側の門扉が元治元(1860)年の火災をくぐり抜けたものと判断できる。

本館行在所は、『西山町誌』によれば

石地行在所 明治十一年九月十四日、柏崎駅行在所御発輦の明治天皇は道を北陸街道にとられ〈中略〉正午には石地駅に御到着の上、内藤久之邸に御小憩〈中略〉内藤家で御小憩中、久之の子久寛は自ら編んだ北越碑銘抄を謹進し庭前で海漁の、小鯛やばらが游泳するようすを天覧に供した。〈中略〉行在所に充てられた部屋は元治元年四月二日(久之の代)上棟の古式門構、平屋建住宅造、玉座の間は十畳で久之が新築したもの、現在までそのまま保存されている。^{注6)}

との記載を見ることができる。これらの記載に基づけば、長屋門と平屋建となる玉座の間、即ち「行在所」は久寛の父となる久之が建築したことになる。建物の小屋裏をみると、長屋門と本館行在所の内、「行在所」と梅乃間のみにおいて同一の体系に基づく番付を確認した。番付は梅乃間北西角を始点として、先番を南北方向で始点を「一」、部屋上では梁筋で「二」、「三」以後は長屋門の桁行となり、半間間隔で「九」までを確認した。後番は東西方向の漢数字で、始点を「一」、本館行在所では半間間隔で「八」まであり、以後は長屋門の梁筋に「廿」までを確認した。つまり、番付は先番及び後番とも漢数字とする組合せ番付である。そのため、本館行在所のうち「行在所」と梅乃間は長屋門と同じ元治元(1864)年の建築と判断することができるわけである。なお、竹乃間

及び梅乃間以北は2階建となっていて、欄間飾なども昭和4(1929)年の銘を見ることができるため、これらは昭和時代初期の建築と考える。

本館広間について、今回の調査で建築年代を示す1次資料は見出されなかった。但し、各室境の欄間に昭和4(1929)年の墨書を見出したことから、昭和時代初期の建築とするのが妥当である。

土蔵の建築年代を示す資料は未見である。軸組材など煤けは著しく、屋根の勾配も緩く、建物には和釘が用いられていた。それらから土蔵の建築年代は江戸時代後期に遡るもので、幕末期の火災を免れた建物とすることができる。

・復原考察

長屋門について建築後の大きな改変としては、門東側の物置内装の改変が先ず挙げられる。継続的に数次に渡る改変があったものと判断できる。また、東端の土蔵は内部が冷蔵庫とする改変があった。但し、門部分及び門西側における改変は少なく、当初の形式をよく留めると考えることができる。伝承では長屋門西側の本館室内側の柱に残る貫通した穴は官軍との交戦に際してとされる。屋根は平成15(2003)年に現在の石川県小松産となる黒瓦に葺き替えが行われたことが、図面資料から判明する。

本館行在所は、「行在所」と梅乃間が元治元(1864)年に建築され、昭和4(1929)年に改築後、応接室及び北側の便所、配線室、風呂など一連の整備は多野藤岡広域市町村圏振興整備組合の施設となった昭和時代後期におけるものと判断することができる。また、長屋門及び「行在所」、梅乃間の屋根は平成15(2003)年に葺替の行われたことが図面資料から明らかである。

本館広間は 当初、南面及び東面の外周は大きな戸袋もあり雨戸と考えられる。

土蔵は当初の形式をよく示すと言える。

6. さいごに

柏崎市西山町石地に所在する久寛荘の建物における建築調査から明らかとなったのは以下の諸点となる。

1) 久寛荘長屋門の前身となる建物の建築年代は明らかではない。伝承によれば、これが元治元(1860)年になって門扉一枚を残して焼失したため、これに基づいて万延元(1864)年になって現在の長屋門を旧規に倣って建築したとするが、現存する建物は、万延元(1864)年に建築されたものと判断することができる。なお、風蝕など具合か

- 2) 本館行在所は、「行在所」と梅乃間が長屋門とともに元治元(1860)年に建築されたことが小屋裏から見出された番付の内容から確認できた。本館行在所の当初における平面形式は、長屋門に加え、「行在所」と梅乃間が建つ形式と判断できる。本館行在所の外観は当初以来の改変が比較的少なく、当初の形式をよく伝えるものと判断できる。
- 3) 本館広間は、欄間墨書より、昭和時代初期の建築と判断できる。建物外周の雨戸が硝子サッシに改められる、全体的には当初の形式をよく伝える。
- 4) 土蔵は規模が大きく、覆屋が蔵前も兼ねる。土蔵の建築年代は仕様等より江戸時代後期頃の建築だと判断できる。

「久寛荘」の建物は令和 4(2022) 年に競売に付され、施設は令和 4(2022) 年 12 月 8 日付で柏崎市に所在する山田建設工業の所有となった^{注 7)}。同社では、施設取得後、自社による改修を進め、令和 5(2023) 年 4 月から新たな活用がなされている。

注1)
http://www8.wind.ne.jp/tanofujiokakouiki/21_osirase/
koiki1-4.html、令和5(2023).06/01、閲覧
注2)
http://www8.wind.ne.jp/tanofujiokakouiki/21_osirase/
rinkaibaikyaku.html、令和5(2023).06/01、閲覧
注3) 西山町誌編纂委員会：西山町誌、816～822 頁、昭和
38(1963).3
注4) 建物としての行在所は本館行在所、部屋としての行在
所は「行在所」として記す。
注5) 西山町教育委員会：西山町の民俗と文化財、179～
180 頁、昭和45(1970).3
注6) 西山町誌編纂委員会：西山町誌、179～180 頁、前掲
注7)
https://www.yamadakogyo.co.jp/2022/12/09/clean-
copy-copy-copy-copy-copy-copy-copy-copy-copy-copy-copy/
令和5(2023).06/01、閲覧



長屋門 外観
南より



長屋門 外観
南東より



長屋門 小屋裏
南西より
東側端部が土蔵となる



本館行在所 外観
南東より



本館行在所 1階
北より



本館行在所 2階
北より



本館広間 外観
南西より



本館広間 外観
南東より



本館広間 内部
西より



土蔵 外観
西より



土蔵 1階
北西より



土蔵 2階
北西より

※所属等はプロジェクト当時のもの

プロジェクト名：

成型加工技術の制約を超越したデザインから製品化までのものづくりプロセスの開発

連携先：株式会社アロマビット

実施期間：令和3年7月27日～令和4年6月30日

プロジェクト主査：増田 譲（プロダクトデザイン学科 教授）

1. プロジェクトの概要・目的

2021年度の第一期の「3D プリンティング（付加製造技術）に最適化されたデザインから製品化までのものづくりプロセスの研究」では、金型成型では作り得ない付加製造技術のポテンシャルを最大限に引き出す造形表現とそれを生かした家電製品開発プロセスを模索し、来るべき付加製造技術時代の新しいプロダクトデザイン及び製品開発の方向性を提示した。第二期はそれを引き継ぎ、アロマロイドのシェル部分のデザインバリエーション製作し、ジェネレーティブデザインと3Dプリンティングによってデザインバリエーションが容易に行え、ユーザー一人々にカスタマイズされた製品を提供することができる事の実証をおこなった。

2. Generative design による Aromashell の造形

AROMAROID では、付加製造技術時代のあたらしい造形表現手法として Generative design（生成的デザイン）を採用し、空気中に漂う、目に見えない Aroma（匂いを可視化しようと試みた。この Aroma を可視化したパーツを Aromashell と呼称する。Rhinceros Grasshopper を用い、アルゴリズムによって生成された Aromashell の有機的なフォルムは、表面と裏面が交互に入れ替わる、人間の想像力を超えた複雑かつ優美な NURBS 曲面で構成されている。この Aromashell は Generative Design でしか達成し得ない表現、且つ 3D プリンティング以外では成形不可能な造形であり、AROMAROID に「鑑賞的価値」を付加する審美的機能パーツである。この Aromashell によって「アートとして鑑賞される家電製品」の可能性を模索した。またこの Aromashell は Grasshopper 上で NURBS 曲線の制御点のパラメーターを変更することで無限のバリエーションを生み出すことも出来、あたかも手作りのクラフト作品のように一台ごとに形状が異なる AROMAROID を作成することも可能となる。（図 2, 3, 4）

今回、新たに Grasshopper によって新しい造形をおこなった。コードは同一で 11 個設定した NURBS 曲面の制御点のパラメーターのスライダバーを動かすことで、前回とは全く違う新しい形状のアロマシェルを生成した。

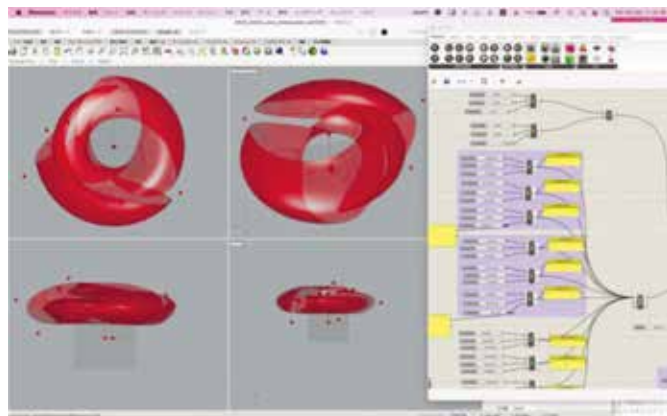


図 1：Generative Design

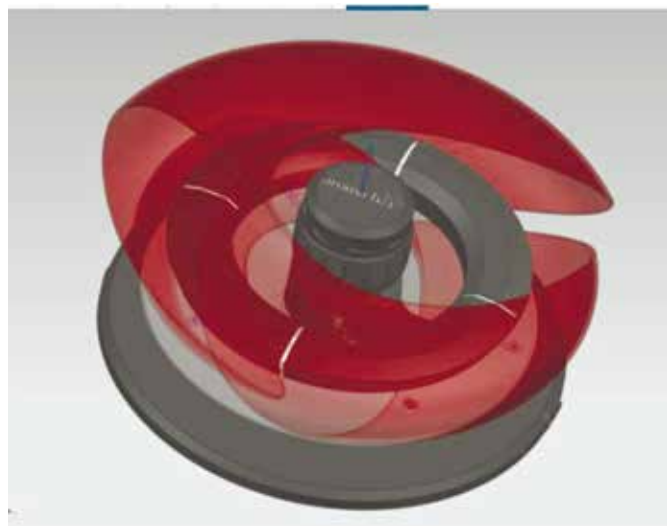


図 2：2022 新しい アロマロイドデザインバリエーション

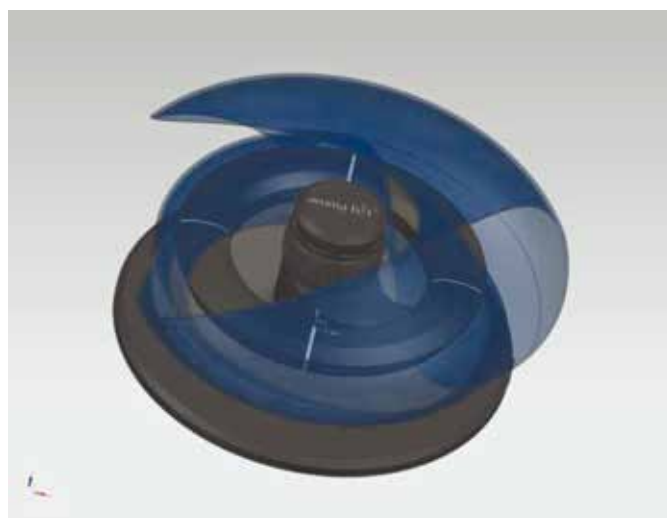


図 3：2021 オリジナルアロマロイドデザイン

※所属等はプロジェクト当時のもの



図 4：3D プリントされたデザインバリエーションのアロマロイド

プロジェクト名：

廃ガラスを利用した就労支援（造形活動）と成果物の商品化に向けた研究

連携先：合同会社リリック

実施期間：令和3年7月1日～令和4年6月30日

プロジェクト主査：中村 和宏（美術・工芸学科 准教授）

プロジェクトメンバー：小飯田 亜海

1. 概要

ガラスをより安全に造形活動に取り入れる方法を研究することにより、ガラスという素材の持つさらなる可能性の追求を行うとともに、就学支援者・就労支援者と共同研究を行うことにより、社会におけるガラス工芸の活躍の場を広げることがを目的としている。研究には本来廃棄される予定だったガラスに新しく付加価値を与えるアップサイクル（創造的再利用）を行う。

2. 本年度の研究方針

本研究は2021年度に行ったプロジェクト「廃ガラスを利用した小学生以上の特別支援を必要とする方々に向けた学習支援（造形活動）の研究」のさらなる追求を行うことを目的としている。

2021年度のプロジェクトでは、以下の3つを主な内容として研究を行った。

- ① 廃ガラスを用いた安全なガラス素材の製造方法の研究
- ② ①のガラスを用いた器の制作方法の研究
- ③ ガラス粘土を用いたワークショップの実施

2021年度の研究を通し、2022年度は以下の通りの目標を設定した。

- ・ガラスの発泡を改善し、安定して使用できるための条件の見直し
- ・より高発色なガラスの追求（調合比・粒子サイズ・器の厚み等の条件の見直し）
- ・より扱いやすい状態での焼成
- ・器のデザイン提案

3. 実施状況

●ガラスの製造方法の改良

2021年度時点では、ミルポットに入れる前の廃ガラスを粉碎する方法として、米袋に入れて金槌で粉碎する方法を提案していた。しかし手動による粉碎ではガラスの破片による怪我の危険性があるため、新たに水砕による粉碎方法を提案する。水砕とは高温に熱したガラスに水をかけて急激に冷ますこと細かいヒビを入れる方法である。従来の方法に比べ、割れたガラスに触る回数が格段に減るため、怪我のリスクが低くなる。加えて粉碎過程での不純物の混

入が減る点や、手動で割るよりも均一に砕くことができるため、パウダー状のガラスにすることにより多くのガラス材料を製造する事ができる点など、いくつかのメリットがある。

水砕を用いた粉碎方法

製造手順

- ①大まかに割った廃ガラスをステンレスのボウルに入れる
- ②電気炉に入れ、520℃に熱する
- ③耐熱の軍手を着用し、電気炉から取り出す
- ④水をかけて急冷する（画像1）
- ⑤水分を取り除き、数日乾燥させる
- ⑥ポットミルに水砕ガラスを投入（画像2）
- ⑦ガラス粉碎状態（画像3）



（画像1）
（画像2）
（画像3）

●ガラスの発泡

ガラスが発泡すると器の中に細かい泡ができている状態のため、膨らんだり穴が空いたりしてしまう。ガラス全体が発泡している状態のため、削っても穴がなくなることはない。器に細かい穴が空いていると、実際に使用した際に汚れが穴に入り、洗って取り除くことが困難になる。そのため発泡は問題を解決し、発生を抑制しなくてはならない。ここでは発泡の原因が焼成温度にあると仮定し、同一条件のガラスを温度を変えて焼成する研究を行った。

結果として、時間をかけて高温状態を維持することで発泡の量が多くなることを知ることができた。廃ガラス同士が溶けてくっつくには長時間の焼成は不要であることも判明したため、電気炉で設定できる最小時間の高温キープに焼成プログラムの変更を行った。

※所属等はプロジェクト当時のもの

●ガラスに添加する接着剤の見直し

制作時にガラスを扱いやすくするために、制作時には接着剤をガラスに添加する。水のみを混ぜたガラスを焼成すると接着剤を添加していない状態のガラスより多くの発泡が確認できた。主な添加剤は、スリップウェアでクリーム状にしたガラスを使用する点 2021 年度の後半以降は合成洗濯のりを用いてきたが、合成洗濯のりは PVA（ビニールアルコール）を主成分としているため、焼成した際に有害物質を発生する危険性がある。200℃以上で分解される物質ではあるが、この物質がガラスに悪い発泡やシワの発生といった作用をもたらしている可能性があるとして仮説を立て、添加する接着剤の見直しを行う。

ガラスへの添加を実験した接着剤と焼成後の主な特徴

木工ボンド：クリーム状にするには不適。後片付けが大変。

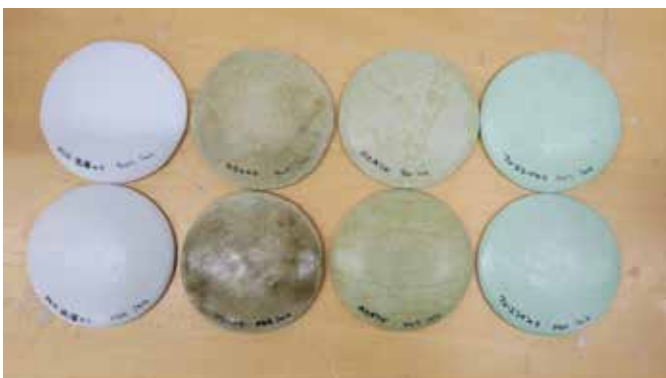
洗濯のり：発泡が確認された。凹凸が目立つ。

フュージングのり：コストパフォーマンスが悪い。粘度が弱い。

ヤマトのり：接着剤としての役割を果たさない。粘度が低い。入ると光沢が増す。

アラビアゴム：接着剤としての役割を果たさない。乾いた後もガラスが固まらない。

CMC：少量で十分に接着の役割を果たす。お湯で溶かす必要があり、接着剤がダマになりやすい。



（画像 4 各焼成状態）

CMC が最も問題解決に適しており、添加後の状態が良かったため採用。粘度が高く型から抜けない、手で触るとヌルヌルとベタつくなど気になる点もあったため、制作方法を改善することで対応をする。また、粉状の CMC を加えた際にダマができやすい。少量のお湯を加えた時点でガラスを少量入れ、すりつぶすように混ぜるか、CMC にお湯を加えてから 1 日以上置くことで改善が可能。

●セパレートデザイン

木枠に切れ込みを入れ、仕切りで区切ってガラスを色ごとにに入れる制作方法を研究。



（画像 4）

●スリップウェア

陶芸の技法であるスリップウェアを参考に、クリームで絞った模様をそのままガラスの器に用いる方法の研究を行った。クリーム状にしたガラスを絞り袋につめ、型の中に絞ることで模様をつける。



（画像 絞り袋）（画像 施工）

●シワの改善

焼成時、棚板と設置している下面のガラスにシワが寄る事象が発生している。施設での制作を想定しているため研磨によりシワの寄った箇所を取り除くことは好ましくない。2 回目のスランピングのための焼成ではシワを取り除くことができなかったため、1 回目の焼成の過程までにシワが発生しないよう対策をする必要がある。



（画像 しわの状態）

焼成したガラスにシワが寄る際、シワの溝に離型紙が詰まっていることから、離型紙上で制作をしたガラスが乾く際に、器と離型紙がくっつくため、焼成して縮んだガラスに引っぱられた離型紙が挟まってシワになっていることが推測される。

①離型紙にボンドを塗る

ガラスの水分を離型紙が吸う工程でガラスと離型紙が密着しているため、ボンドを離型紙に事前に塗って乾燥させることで一層の膜を作った。しかし、焼成に使用しても大きな変化は見られなかった。

②制作→乾燥の工程をPPマット上で行う

作品を乾燥させてから離型紙に移し、焼成する方法に変更。一度制作した台から外す工程が追加されたため、焼成時にガラスの表裏を反転させることができるようになった。これにより、ガラスのシワを改善し、使用する面の凹凸をなくすことに成功した。塩ビシートでも実験をしたが、下に敷くシートが暑いほど、シートを剥がす際にガラスが壊れやすくなる。ここではクリアファイルを使ったものが最も扱いやすかった。

(画像 PP マット使用)

(画像 離型紙使用)

(画像 PP マット使用)



●発色の改善

ミルポットを通して粉状に加工された廃ガラスは、1度ザルを使って大きな粒子を取り除くことで粒の大きさをある程度揃えている。しかしザルの目以下のガラスの中に含まれる非常に細かいガラスが混入しており、これがガラスの発色が悪くなる原因となってしまう。粒子は細かいほど色が白くなるため、過度に細かい粒子は取り除く必要がある。また、細かい粒子を残したまま制作をすることで、軽い(細かい)粒子が器の上面に偏り、制作の途中で色のム

ラができてしまうことが判明した。そのためここではボウルを使用し、水に浮くような細かい粒子を浮かせて洗い流す方法で粒子の大きさを揃え、発色や色ムラの改善を行った。

●制作時に想定される様々な状況を想定した追加研究

・接着剤を添加した状態のガラスの長期保存による質の変化

洗濯のりを添加したガラスを長期保存すると、焼成時に黒く変色することが確認された。添加剤を CMC に変更してから再度長期保存によるガラスの変化を実験したが、調合後 2 週間後と 40 日を経過したものを使用しても大きな状態の変化は確認されなかった。CMC のもつ粘度自体は日付の経過とともに低下しており、再度 CMC を加える必要がある。



(画像 各焼成状態)

・スランピング時に用いる器の形状

深い形状の器を使用すると、スランピング時に溶けたガラスが引っかかる可能性がある。ガラスが器に引っかかるとバリが発生したり、器が変形する可能性があるため、浅めの器を用いることが好ましい。また、ガラスの変形を少なくするため温度の見直しを行った。



(画像 各焼成状態)

・枠の検討

1つの器のガラス量を規定し、作る個数や色に合わせてガラスを指定の量で調合する方法は手間が多くなるため、感覚的に枠に詰める量が分かる方が好ましい。5.5mm 厚の枠を用いることで、擦り切りまでガラスを詰めると丁度いい厚さで器を作ることができる。

枠の素材について、木枠は水分に弱いいため長期的な使用

※所属等はプロジェクト当時のもの

が見込めないことが判明した。ガラスを乾かしている際に木枠が水分を吸うため、ガラスが木枠に張り付いて離型が困難になる。また、乾かす過程で木が長期的に湿り気を帯びている状態になるため、木枠が反り返ることが確認されている。反り返った木材は隙間からガラスが溢れるため使用できなくなる。枠にセパレートを差し込むための溝や、離型を補助するための切れ込みを入れる必要がある点から、複雑な形状に加工できるレーザーカッターに対応しており、力を加えた際に多少の変形が可能な素材（アクリル板など）が好ましいと予測される。



（画像 充填状態）



（（画像 枠破損））

・乾燥時にガラスがヒビ割れる現象について

ガラスを急速に乾燥させるとヒビ割れる事象が確認されている。水分が蒸発する速度が遅くなるよう冷暗所で乾燥をさせることにより、ある程度ヒビ割れを改善することができる。大きい作品ほど乾燥速度に関係なく大きいヒビ割れができるため、大きい器を制作する際は一度乾燥させてから作品全体を湿らし直し、溝を補填することで修復ができる。



（画像 乾燥状態）

●2023年度第1回ワークショップの実施

日時：2022年6月23日

場所：ピクニックロータース施設内

内容：スリップウェアを用いた器とセパレートを用いた器を参加者に制作してもらう。

目的：複数人の参加者に共通の方法で制作をしてもらい、安定して制作することが可能かを試し、現場で制作が可能な方法であるか、制作方法に不備がないかを詰めていく。

実施状況：

課題：第一回のワークショップ時点では接着剤として洗濯のりを添加して使用している。使用したガラスの水分量が少なく、流動性が悪かったため、セパレート式のガラスの器の色がうまく接合されず、焼成後に色の境目が上手くくっつかないままガラスが収縮してしまった。制作する人によってどれくらい敷き詰めるかが変わるため、安定したクオリティを制作することが困難であることが判明した



（画像 収縮前状態）



（画像 収縮状態）

●2023年度第2回ワークショップの実施

日時：2022年12月3日

場所：マナボーテ村上2階

内容：スリップウェアを用いた器とセパレートを用いた器を参加者に制作してもらう。

目的：複数人の参加者に共通の方法で制作をしてもらい、安定して制作することが可能かを試し、制作方法の最終的な見直しに役立てる。

実施状況：第1回の改善策として、以下の内容を変更して実施を行った。

- ・ガラスに添加する接着剤を洗濯のりからCMCに変更
- ・ガラス粘土の流動性を上げ、型の中に押し込む工程をなくす制作方法に変更
- ・作品の厚みを改善するために木枠の制作に使用したMDF板の厚みを7mmから5.5mmに変更
- ・作業土台を離型紙の上からPPシート上に変更
- ・商品化しやすいデザインを見本から選んでもらう方法に変更。（一部参加者の希望により、早く完成した人は2個目で自由なデザインの器を制作した。）

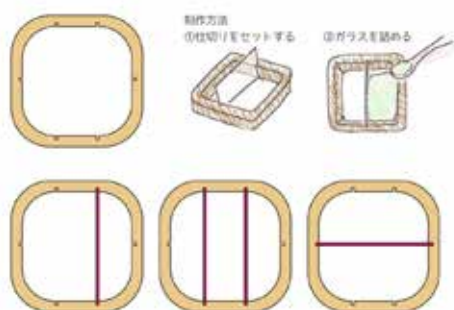
※所属等はプロジェクト当時のもの

- ・焼成時に発生したトラブルを踏まえ、スランピングに用いる器や温度帯を変更

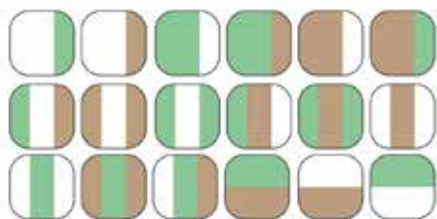
課題：以下の問題点が浮上したため、ワークショップ後に制作方法の改善を行った。

- ・焼成後、ガラスに色ムラが確認されたため粒子の大きさを揃える改良を行った。
- ・短時間で制作できる方法でワークショップを行ったため、大皿で線がぼやけてしまう状態が確認された。商品制作の際は、一度クリーム状のガラスを乾かす工程が必要。

図② セパレート デザイン発本



仕切りの入れ方や色の違いによって以下のデザインの器が制作可能



図③ スリップウェア デザイン発本



デザインを考えよう



4. まとめ

●今年度に行った主な研究内容

- ① 廃ガラスを用いた安全なガラス素材の製造方法の研究
- ② ①のガラスを用いた器の制作方法の研究
- ③ ガラス粘土を用いたワークショップの実施

昨年度の活動を踏まえて設定した2022年度の目標の達成状況について

- ・ガラスの発泡を改善し、安定して使用できるための条件の見直し

温度帯や添加する接着剤を見直すことにより発泡の改善に成功した。また、ワークショップを通して様々な人に実際に制作してもらい、個人によってクオリティに差の出にくい、安定した質で制作が可能な方法に変更した。

- ・より高発色なガラスの追求（調合比・粒子サイズ・器の厚み等の条件の見直し）

ミルポットを使用し、粉状に加工した廃ガラスを一度水で洗うことで粒子の大きさを統一し、ガラスの発色を高めるとともに色ムラの発生抑制を行った。

- ・より扱いやすい状態での焼成

接着剤の種類や量を見直し、それに合わせた制作方法の変更を行った。しかし、乾燥日数の調整や枠に用いる素材の変更について、今後検討が必要。

- ・器のデザイン提案

スリップウェアを用いた器と、セパレートを用いた器の2種類を展開。どちらも安定して制作が可能な状態まで制作方法を確立した。大きな器になるほど作りにくくなるため、今後改善の必要あり。模様に関しては食器として扱いやすいものを選び制作を行った。

●来年度に予定している主な研究内容

- ・実際に提携先である合同会社リリックのある村上市で廃棄されるガラスを使用し、現地で実際に商品作りを行う
- ・現場での制作を通し、浮上した問題点などの改善を行う
- ・流通に関わる方法を、実際に製造・販売を行いながら検討していく。

軽トラック及びトレーラに装着するテント型幌の開発

連携先：株式会社オートプロ

受託期間：令和4年7月1日～令和5年3月31日

プロジェクト主査：齋藤和彦（プロダクトデザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：石原良倫、佐々木雄一郎、中室陽太、中村耕大

1. はじめに

株式会社オートプロは上越市で新車・中古車販売業や整備を行う自動車関連の企業であり、同時に軽自動車を中心としたトラックやトレーラの荷台用の幌を製造販売している。幌については業務用として使われる実用的な製品が主となっているが、昨今のキャンプやアウトドアレジャーの高まりを受けて、よりアウトドアユースに特化した「スーパーホロカスタム」の進化型として、新しさを打ち出したオリジナリティの高いデザインの提案を依頼された。

2. 実施状況

一般的な幌では、側面や背面にある開口部を巻き上げて荷台の荷物を出し入れするのに対し、オートプロの「スーパーホロ」のシリーズは幌全体が大きく左右に傾き、荷台へのアクセスが容易であることが大きな特徴である。その特徴を理解するために実車の確認を行った。これにより自転車やキャンプ用具などの大きな荷物の出し入れが容易であることや人の乗り降りもしやすくなることがわかり、荷台の大きさも二人が横になるのに十分な空間があることが確認できた。「スーパーホロ」を載せたトレーラのサイズは全長 3050 全幅 1450 全高 1020（単位 mm）と軽自動車規格に収まることから、一般的なトレーラと異なり牽引免許が不要となることが大きな利点であり、軽自動車でも牽引も可能である。（図1）

この特徴を生かしたデザインを考えるために、キャンプ地まではキャンプ用品やマウンテンバイクなどを載せて移動し、目的地に着いたらそれらを下ろして、テントとして休憩や宿泊スペースに荷台を使うという「2つの使い方ができる幌」をコンセプトとした。

オートプロでは軽トラック用幌とトレーラ用幌を販売しておるが、それぞれ幌の大きさを比較すると、トラック用は全長 1900 全幅 1460 全高 1070、トレーラ用は全長 2000 全幅 1400 全高 1100（単位 mm）とわずかに異なるが、デザインを考える上では大きな変更なしに対応できるということから、アイデア展開はトレーラ用をベースに進めることとした。

アイデアスケッチは左側面と左後方からの二方向からとし、共通のスケッチベース用意し展開した。アウトドアレジャーで使用することが狙いであるため、既存の幌の形状にはこだわらないこと、グラフィックも含めた提案とすることを条件にスケッチを進めた。

ただし、幌もテントも一般的には骨組みとなる構造材と、それに布素材を張ることで構成されているため、骨組みに布素材が追従できる形状であることが求められる。骨組みにはアルミ角材を用いるため三次元に曲げることは製作上の難易度が高くなるため、骨組については直線および単一曲率のみの曲線による構成という制限を設けた。アウトドアでテントのように使われるため、換気の窓や開口部を設け、機能とデザイン上のアクセントとして取り込んでいる。一例としてこれまでのオートプロの製品との統一感を持たせるため、短辺を上にした直角三角形をデザインに取り入れ、この部分に通気性を考慮した窓としての機能も持たせることにした。（図2）

スケッチを検討する段階で左右非対称となるアイデアもあり、全体を把握しやすくするため立体での検討および提示が必要と考え、スケールを統一してスチレンボードを使用したモデル製作も行った。大きさは牽引する車のミニチュアとのスケール感を合わせるためおよそ 1/16 となる全長 120mm で製作した。また軽トラックに乗せた場合の状態も同時に提示した（図3）

これらのスケッチとモデルを元に先方の担当者と打ち合わせを行った。各アイデアについては担当した学生がプレゼンテーションし、その後質疑を行った。その結果、提示したデザイン案のうち数点を候補として持ち帰り、新規性や実現性を考慮して検討することになった。

その後、骨組みに曲線を用いた構成に新規性があるとして屋根部分を曲線で構成したドーム型とし、現物による試作検討が進められた。同時に屋根部分の幌素材には光が透過するものを採用し、キャンプなどで夜間にテントとして使用した際に、室内の光が屋根部分を通してほんのり明るく光ることで実用的な幌との差別化を図りたいという意向が示された。そこで検討中の骨組みの画像を元にドーム型屋根と基本骨格に沿ったデザインを再検討した。（図4、5）

またこれまではトレーラを基本としてデザインを進めてきたが、イベントでは軽トラックも展示することになり、すでに車両も決定していることから、この車両に合わせてカラーとグラフィックを変更したデザイン案も提案した。（図6）

これらの提案に対して、出展予定のイベントに日程に合わせて試作が行われ、2022年11月19～20日に愛知スカイエキスポにて開催されたフィールドスタイルジャンボリーにて「スーパーホロカスタム D トレーラ」として発表・展示され

た。(図7、8)

オートプロ様からのコメントは下記の通り。

頂いたアイデアスケッチを参考にして屋根部を丸みを帯びたドーム型にしました。特徴は屋根部とサイド部のシートの素材を変えて室内でランタンを点灯した時に屋根部が「ポワッ」と光る感じに仕上げてみました。

会場の反響的には「ドーム屋根」の感じがあまり「(良い意味で) みたことがない」や屋根部が「かわいい感じ」という声がありました。

3. 今後の展開

今回の業務ではすでに市販されている製品に対する提案のため、実際に公道で使用するモビリティとしての制約も多く、高速道路を走行することも考慮すると、実績のある構造や構成を踏襲する必要があった。それでも提案した内容の一部でも採用されたことは、モビリティデザインのプロセスや面白さを実感できる有意義なものであった。また今回の提案では本学からのアイデアや発想のユニークさを評価していただき、スケッチのようなデザインの実現へ向けて検討していくとのことであった。今後、メイドイン上越として市の特産品認定や来年度のフィールドスタイルエキスポ出展を目指し、引き続き協力を要望されている。

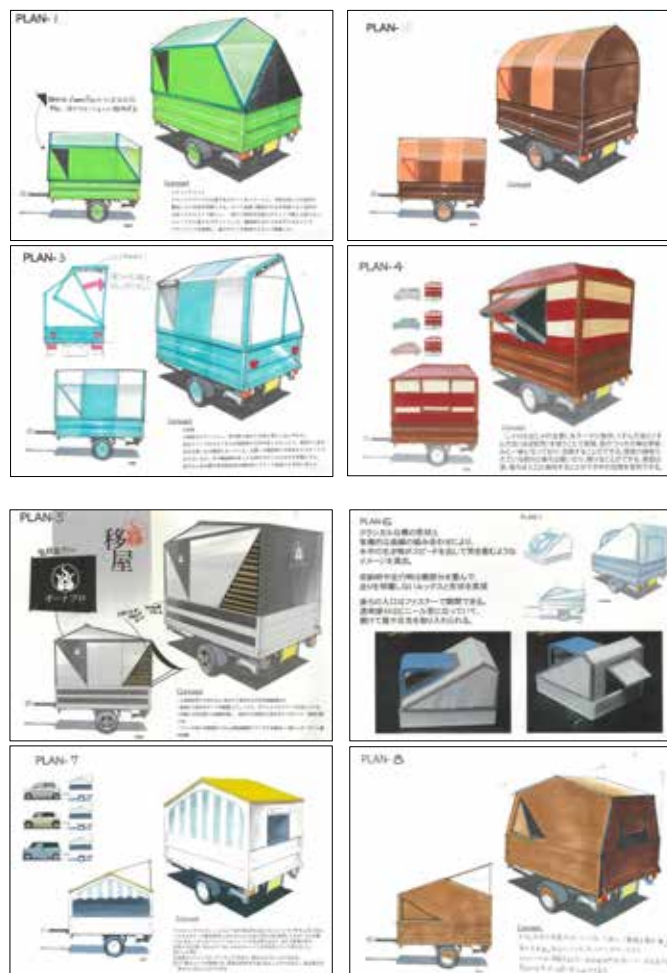


図2：提案スケッチ（抜粋）



図1：ベース車両



図3：スチレンボードによるスケールモデル（例）

※所属等はプロジェクト当時のもの



プロジェクト名：

長岡市中心街イルミネーション事業開発

連携先：長岡電気工事協同組合

実施期間：令和4年8月1日～令和5年3月31日

プロジェクト主査：水川 毅（視覚デザイン学科 教授）

1. 長岡市中心街イルミネーション事業開発の発端(2021年度からの継続的实施)

プロジェクト担当の水川が長岡造形大学に着任したのが2020年であり、このイルミネーション事業開発は2021年度からスタートした。それまで長岡電気工事協同組合さまが実施していた長岡市中心街イルミネーションは、その名の通り長岡市中心街にイルミネーション装飾をする施策であった。水川は長岡市民がイルミネーションを観て終わるだけでなく、観た人たちのコミュニケーションを可視化することでイルミネーションの成果を図りたいと企画した。

実施場所：アオーレのテラス

実施風景：



結果：SNSからのイルミネーション写真投稿約50から受賞者を決定し、記念品を贈呈することができた。

2. 2022年度 長岡市中心街イルミネーション事業開発の方向性

2021年度が SNS からの写真投稿（フォトコンテスト）を応募し、観るだけのイルミネーションから観客との双方向性を可視化できたため、2022年度はイルミネーションで長岡市中心街を回遊してもらうというコンセプトに進化させた。

場所：長岡駅前、フェニックス大手、ショッピング大手

名称：ハートナガオカプロジェクト

内容：#ハートナガオカ は長岡商店街に設置された3か所のイルミネーションを「観て、巡って、楽しむ」プロジェクト。

3か所のイルミネーションと一緒に撮影したら、

ハッシュタグ #ハートナガオカを付けて発信してもらう。

そして発信された写真に俳句、文章、イラストなど付けて楽しんでもらう。

告知ポスター：



3. 2022年度 長岡市中心街イルミネーション事業開発の実施

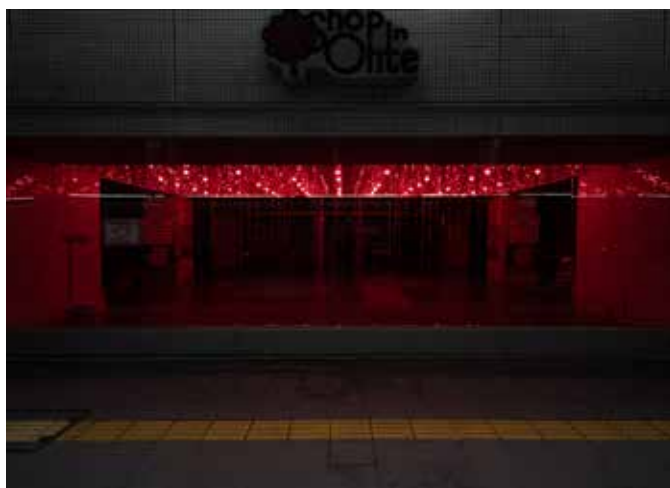
長岡駅前



フェニックス大手



ショッピング大手



結果：場所が3か所となり、それらを回遊してからSNSで写真投稿を促したため、応募のハードルが上がって投稿数が伸びなかった。また事前告知期間が短いことによる認知不足もあった。しかし長岡新聞に取り上げられ、一定の訴求効果はあったと言える。



知的財産の管理・活用

長岡造形大学では教職員や学生が創出した知的財産を保護・管理・活用する活動に取り組んでいます。

教員主体のデザイン研究開発、地域協創演習といった地域の課題解決に学生が取り組む授業などで知的財産が創出されるケースがあります。いずれも創出された知的財産を大学が適切に管理し、商品化して販売するようなケースでは利活用について契約の締結を行っています。

これまでの学生創出知的財産の活用事例の一部（活用にあたり学生へ対価が支払われたもの）

「Δt」2022

アジアデジタルアート大賞展 優秀賞受賞 *

*「Δt」は作品の総称であり、知財の対象は「Δtシリーズ Ripple」となります。

薄い透明アクリル板を積層し連続的に変化させることで、動的な立体物として構成した作品です。この手法の研究により、CG でしか表現できないような水々しく、滑らかな動きが物理的に可能となり、海中に生息する透明な架空生物をインタラクティブなメディア作品として表現しました。

「Δtシリーズ Ripple」特許出願中



「地産地消型モビリティ」

2020 年度グッドデザイン賞受賞

「気軽な農耕車」というコンセプトで作られた「地産地消型モビリティ」は、人口のおよそ1割が農業に関わる長岡の地域特性をふまえて制作しました。田畑への移動や収穫の補助を前提に、日常の買い物にも使え、積雪時にも走ることができるよう、機動性の高い農耕車として車体構成を考えました。

地元企業との協創により、地元で製造可能な車体と体制を構築しました。

平成30年度意匠登録



AROMAROID (アロマロイド)

スピーカー / 照明一体型卓上匂いセンサーカバー

株式会社アロマビット、山形大学、本学が、「ニオイ可視化センサー（アロマビット提供）」をテーマに基づいたプロダクトコンセプトモデル「AROMAROID」を開発しました。デザインを本学の増田譲教授が担当し、3D プリンティングのポテンシャルを最大限に引き出す為に、コンピュータプログラムによってデザインを生成する Generative Design（生成的デザイン）を採用しました。金型成型では作り得ない、複雑かつ優美で抽象彫刻のように鑑賞に耐える造形を持った製品を目指しました。

令和3年度意匠登録



※所属等はプロジェクト当時のもの

地域協創演習

地域協創演習は、地域社会及び企業と本学教員・学生が互いに協力し、新たな知的価値、地域価値、企業価値の創出を目指す演習授業です。

学生との協創を希望する地域や企業の方からの相談を受け、学生にとって教育効果が高いと判断した場合に授業として対応しています。授業内で教員による指導のもと、学生がデザインを通して様々な課題解決や新たな価値創造に取り組んでいます。

日常用品のデザイン提案 (家庭内での情報可視化の試み)

期間：令和4年5月～令和4年9月

担当教員：真壁 友（視覚デザイン学科 准教授）

平原 真（視覚デザイン学科 准教授）

森本 康平（大学院造形研究科 准教授）

履修者数：6人

授業概要およびテーマ

日本精機株式会社の民生品部門の協力で行う授業である。日本精機の強みである測定、情報可視化の技術を利用することを前提にセンサーや表示器を使い、家庭内で使う道具のデザイン提案を行う。

日本精機の主力商品は自動車のスピードメータやエアコンの表示装置、複合コピー機の表示部分などである。また民生機器にも力を入れている。そこで日本精機の強みを生かし家庭内での様々な場面で使う道具を提案する。見えないものを測定し、それを視覚化することにより生活を豊かにする物、実際に商品化されるものを目標に提案を行う。

この演習の中ではアイデアを考え、プレゼンテーションを行う。必要であればモックアップやデモンストレーションの動画も作成する。

実施スケジュール

令和4年5月 ガイダンス、レクチャー

令和4年6月 アイデア出し

令和4年7月 制作

令和4年8月 プレゼンテーション準備

令和4年9月 プレゼンテーション

実施状況及び成果

開始時のニュースリリース

https://www.nippon-seiki.co.jp/news/top_news_category/長岡造形大学と日本精機が、産学連携授業による/

プレゼンテーション時のニュースリリース

https://www.nippon-seiki.co.jp/news/top_news_category/長岡造形大学生によるアイデア-プレゼンテーション/



所感、今後の展望など

日本精機の協力により、技術の紹介、企業紹介を行い、その前提を持った上で商品提案、アイデアを作ることが可能になった。

今後も日本精機様とのコラボレーションは続けていきたい。

今回はデザインの提案だけに終わったが、今後はデザインモックアップ、マイコンなどを使った実働モックの作成まで取り組み、より具体的な提案へ取り組んでいけるように授業の内容を見直したい。

コスモスのラビリンス

期間：令和4年4月～令和4年10月

担当教員：境野 広志（プロダクトデザイン学科 教授）

履修者数：18人

授業概要およびテーマ

NPO 法人 UNE が活動している福祉市民体験農園（千秋が原の河川敷）に、コスモスを栽培し、迷路作りやイベントを行うことで農福連携活動や市民との交流を活性化させる。

実施スケジュール

令和4年4月 説明会、レイアウトアイディア出し

令和4年5月 現地見学、栽培講習、レイアウト案決定

令和4年6月 耕作（UNE）、綱はり、播種

令和4年9月 迷路作成、イベント

令和4年10月 畑仕舞

実施状況及び成果

4月より現地調査、プラン作成、チーム分担、草刈、種まき、迷路の作成、関係揭示物の作成などを行った。また UNE の活動に参加し、障害者やフードバンクの方々と共同で農業体験などを行った。今年はイベント時に雨天が多く、予定通りには進まなかった面もあるが、プロジェクトとしては概ね成功したものと評価している。



所感、今後の展望など

障がい者や NPO など学生が普段接しない関係者との作業などは良い経験となったものと思われる。

来年度については現時点で要望はなく、未定である。



カカシプロジェクト

期間：令和4年4月～令和4年10月

担当教員：境野 広志（プロダクトデザイン学科 教授）

履修者数：30人

授業概要およびテーマ

農村、棚田の景観を向上させる独創的な案山子を創作し、実際の地に設置することで、地域の活性化や学生の社会性を涵養する。活動の過程では創作だけでなく地域の方々と深く交流し、農作業や農村維持作業への参加も行う。また存続が危惧されている中山間地の農業やコミュニティについての理解を深める。



実施スケジュール

令和4年4月 ガイダンス、現地調査

令和4年5月 カカシ作成

令和4年6月 カカシ設置、現地交流

令和4年7月 農業体験、現地交流

令和4年10月 カカシ撤収、現地交流

所感、今後の展望など

例年のプロジェクトとなり、運営方法や地域の受け入れもスムーズになってきた。しかし、一方でややルーチン化してきた感もある。

今後は学生による地域の活性化も重要なテーマとしてより積極的な活動にして行くことを考えている。

実施状況及び成果

当初のスケジュール通り実施した。30人の履修者の内29人が単位を修得した。

現地設置時や撤収時には新潟日報、日本農業新聞、栃尾タイムズなどの取材もあり、撤収後の講演では長岡市都市整備部からの参加もあった。

学生も主体的に取り組み、地域住民にとっても良い交流となった。



地域おこし協力隊の準隊員になろう！

期間：令和4年5月～令和5年1月

担当教員：板垣 順平（大学院造形研究科 助教）

履修者数：15人

授業概要およびテーマ

地方創生の担い手の一つに、地域おこし協力隊制度がある。この制度は都市部に住む若者が地方都市や中山間地域に移り住み、地域に根差した活動や起業的アクションを通じて地域課題の解決や移住促進につなげるものである。

このプロジェクトでは、長岡市政策企画課に所属する「半学半域型」の地域おこし協力隊員の活動に参画しながら、地域課題の解決に必要なスキルやノウハウを学ぶとともに、自身ができる地域課題の解決方法を見つけてチャレンジする。

実施スケジュール

令和4年5月 ガイダンス、参画する隊員のプロジェクトの選択

令和4年6月-10月 各隊員の活動や取り組みに参加

令和4年11月-令和5年1月 自ら企画、提案した活動を隊員らと一緒に実施

実施状況及び成果

長岡市政策企画課に所属する地域おこし協力隊員の活動に学生らが参加し、地域おこし協力隊の存在目的や、隊員によって異なる地域課題の解決に向けた取り組みなどに対する理解を深めた。

今年度のプロジェクトでは、地域資源を題材としたおもちゃの制作ワークショップを地域おこし協力隊員らと一緒に企画し、長岡市内の小学校や HAKKO Trip などを実施した。

また、新潟県内の高校生を対象にデザイン思考を学ぶためのワークショップの企画から運営まで携わった。さらに、長岡市内でテントサウナイベントを通して地方創生を目指す NN サウナの団体からの依頼を受けて、イベントのサポート等にも参画した。

参加学生からは「自分自身のやりたいことが地域課題の解決につながる事が面白かった」、「地域の小学校や団体と関わることができたことで自分もいつかイベントなどをやってみたい」などの意見があり、地域課題の解決に対する意識の醸成や多様な方法についての理解を深めることができた。



所感、今後の展望など

地域おこし協力隊員の活動や地域活動団体のイベントなどに参画できたことで、自身の得意とすることや、やりたいことを実施しながら地域の課題解決を目指す方法やイベントの企画・実施に必要な知見などを学修することができた。

また、地域おこし協力隊員が自身の活動を進める際の地域住民や地域の諸団体等との関わり方についても理解を深めることにつながった。

ニョロニョロの知らない世界 (長岡高専とのコラボ企画)

期間：令和4年5月～令和4年10月

担当教員：板垣 順平（大学院造形研究科 助教）

森本 康平（大学院造形研究科 准教授）

履修者数：8人

授業概要およびテーマ

長岡工業高等専門学校との混成チームによって「ミミズがある新しいライフスタイルの提案」をテーマに、ミミズのコンポストシェアリングや、ミミズ粉末の普及など、さまざまな視点からミミズの活用につながるようなアイデアを自分たちで自由に考える。また、三井住友海上火災保険株式会社の証券アナリストによる金融リテラシー講座や KDDI によるアイデアの社会実装やリーンキャンパスの作成講座などを踏まえて、アイデアをまとめる。

実施スケジュール

令和4年5月 オリエンテーション

令和4年7月 顔合わせ、事前レクチャー

令和4年8月 リサーチ結果の共有、プロトタイプ
の作成、評価、検証、金融リテラシー講座、
リーンキャンパス作成講座、成果発表

実施状況及び成果

長岡工業高等専門学校と連携して、ミミズがある新しいライフスタイルの提案をテーマに、ミミズ粉末の普及やミミズコンポストのシェアリングサービスの新しいアイデアの提案を通して、SDGs への貢献やイノベーションを創出できる起業家マインドを育成することを目的に実施した。具体的には、造形大8名、高専8名の学生が混成チームを組み、デザイン思考や人間中心デザインの視点をもとに、日常生活の中から潜在ニーズや問題を見つけ出し、その解決につながるプロトタイプの制作や評価、検証などを繰り返しながら、既存の概念を払拭したプロダクトやサービスの提案などを行った。

また、8月に実施した集中講義では、三井住友海上火災保険の証券アナリストから経営者に役立つ金融リテラシー講座、KDDI からアイデアを社会実装に繋げるために有効なリーンキャンパスモデルの作成講座なども実施するなど、アイデアの提案だけでなく、ビジネスモデルとしての展開までを視野に入れながらそれぞれのグループが最終的なアイデアをまとめた。



所感、今後の展望など

今年度で第2回目となる当該プロジェクトは、初年度と同様に長岡造形大学と長岡高専の学生がそれぞれの専門性を生かしながらグループワークを実施した。また、今年度は金融リテラシー講座や社会実装講座など、アイデアをビジネスモデルとして展開するために必要なレクチャーを追加するなど、プログラムのコンテンツも充実した内容となった。

一方で、レクチャーの時間が増えたことによって、ワークについては少し時間が足りなかったように感じる。次年度は、授業内容の見直しを図りたい。

FM RADIO CAMPUS

期間：令和4年4月～令和5年3月

担当教員：池田 享史（視覚デザイン学科 助教）

履修者数：15人

授業概要およびテーマ

長岡造形大学発、学生が創るクラフトラジオ。

FM ながおか 80.7Mhz にて、令和4年8月6日（土）から令和5年年1月末までの半年間（21:10～25）、毎週土曜日に OA した。

インターネットの普及により「ポッドキャスト」や「ライブ、オンデマンド配信」による音声メディア表現が広がっている現在、RADIO CAMPUS では音メディアとの親和性が高い学生たち15名が新しい感性で番組を創った。

実施スケジュール

令和4年4月 オリエンテーション

令和4年5月 企画決定、取材開始 → 各自で編集

令和4年6月 学生による番組ロゴや広報の提案

令和4年7月 元 NHK アナウンサー石澤典夫さん講演

令和4年8月 初回放送 リリース開始

令和4年9月 ミスユニバース森 理世さんへの特別取材・編集

実施状況及び成果

FM ながおかでお馴染みの看板パーソナリティー佐藤央さんがプロの所作指導として、月1で来校。学生の企画や内容を監修していただきながら、個人の企画を形にして、企画→取材→編集→OA と制作を行った。

個々のアイデアや企画が個性的で面白く、普段大学では学べない内容となった。

また、長岡市の老舗和菓子店や長岡技術科学大学への取材は学生と社会を繋ぐきっかけ作りに役立った。



所感、今後の展望など

半年間の OA を通じて、非常に有意義な番組制作が出来た。

番組実装を行う事で学生の士気が高まり良いチームワークが生まれた（特に MC など）。

反省点として、番組の認知度が少なかった為、反響があまりなく、次年度は手応えのある広報活動を行いたい。

文具館長岡店N I D売場構築

期間：令和4年7月～令和4年12月

担当教員：金澤 孝和（プロダクトデザイン学科 准教授）

履修者数：4人

授業概要およびテーマ

今年度は、事前にテーマを設定（提供）せずに、グループワークでの内容を踏まえて、学生同士で共通のテーマを見出す。

実施スケジュール

令和4年7月 調査・テーマ設定

令和4年8月 コンセプト立案・発表

令和4年9月 コンセプト修正・アイデア展開

令和4年10月 アイデア発表・検討

令和4年11月 プレプレゼン

令和4年12月 プレゼン

実施状況及び成果

今年度も新型コロナウイルスの感染予防対策を最優先として授業は運営された。感染予防対策として、対面でのコミュニケーションを減らすべく SLACK の活用をして、授業における情報を（各学生の進捗状況も）全員で共有した。しかし、対策の甲斐虚しく、履修者も授業運営側にも罹患者が出て、授業スケジュールはひどく混迷した。昨年度までは、テーマを事前に設定してからPJをスタートしたが、今年度はグループワークを経て、テーマから自分達で考えるようにした。結果、テーマは「長岡造形大学」となった。提案を自分事としてとらえることによる、一連のデザインワークへ理解が深まることが期待された。実際は、自分達がターゲットとして、アイデア展開したことと、ビジネスベースでの実現可否とのギャップに苦しむこととなった。しかしながら、提案は面白くブラッシュアップで精度があがれば実現できそうなものもあった。スケジュールの混迷で、最後日程的に厳しかったことが悔やまれる。

提案を具現化させる成果は見出せなかったが、学生の成長は大いに感じる事ができた。教育としての授業成果は満たせたように思う。滝沢印刷様とは、来年度も継続して授業連携していく話をしている。

所感、今後の展望など

連携先である滝沢印刷文具館様とは、単年度で成果を求めず、継続する中で可能性を見出そうというお話をしている。

数年は同じスキームで演習を継続して行く予定である。

ヨイタタンサケイカク next

期間：令和4年4月～令和4年11月

担当教員：北 雄介（建築・環境デザイン学科 助教）

履修者数：7人

授業概要およびテーマ

「ヨイタタンサケイカク」ではこれまで、長岡市与板町において、街歩きを通じて知られざる魅力を発掘し、4種類の地図を制作してきた。

この演習では与板小学校など、地元の方との連携の元、一緒に街を歩き、その体験を表現に昇華することを目指す。ここでの「表現」の媒体は、地図に限らない。街から何を見出し、何をデザインするのかを議論し、質の高い成果を出してほしい。

実施スケジュール

令和4年4月 キックオフ、フィールドワーク

令和4年6月 「キャンドルナイト@与板」内で街歩きイベント「ウラヨイタタンサケイカク」

令和4年9月 ラジオ番組の収録

令和4年11月 街歩きイベント「ヨイタ！ラジオウォーク」、与板小学校3年生との街歩きイベント

実施状況及び成果

●6/11（土） ウラヨイタタンサケイカク

初回のフィールドワークで、たとえば倉庫の小さな扉が異世界への入り口となっているような、妄想をすることで与板の見方がより魅力的になることを発見した。そこで夕闇迫る与板の街に、「ウラヨイタ」の痕跡を探す街歩きイベントを開催した。25名の参加者が、学生たちの案内の元、3グループに分かれて歩く。腕には、ウラヨイタの住人である「ともしびちゃん」がお供する。与板の内外からの参加者が、与板の何気ない風景から妄想を築き上げる会となった。



●ラジオ番組制作

上記イベントで得られたような、「ウラヨイタ」の痕跡を巡りたくする媒体を探った結果、視覚ではなく音で想像を駆り立てるラジオがよいのではというアイデアが出た。ラジオのチューニングを回せば時折異国の音が入ってくるように、「ウラヨイタ」からの音が現実の与板に漏

れ出てくる、という設定とした。ラジオパーソナリティのキャラ設定もした上で、「ウラヨイタ」の不動産物件紹介、「オモテヨイタ」への探訪記など、8つのコーナーの台本を書き、学内スタジオで収録した。その成果は、webで公開している。

<https://yoitatan sakeikaku.net/radiowalk.html>



●11/3 ヨイタ！ラジオウォーク

完成したラジオ番組を聴きながら与板の街を再び歩くイベントを、11/3に9名の参加者で開催した。2グループに分かれ、ラジオのコーナーを聴き、そのコーナーで紹介されている場所を巡り歩く。そして最後に日本茶カフェ「茶々いま」に集まり、ラジオの感想や、新しく見つけた「ウラヨイタ」について振り返った。ラジオを聴きながら歩くという体験は新鮮だったようで、普段の暮らしの中でも音を聴き、想像することができるという感想もあった。振り返りの対話の中でも、ウラヨイタへの想像を深めることができた。



●11/10 与板小学校3年生との街歩き

その翌週には、与板小学校の3年生の総合学習の時間にお邪魔し、街歩きを行なった。全体で40名の小学生のうち、14名がラジオのグループに参加。この日はラジオを聴くことをきっかけにして、「ウラヨイタ」の痕跡を探すことがメインとなった。そして見つけた痕跡を、ラジオ番組へのお便りというフォーマットでイラストとともにまとめた。子どもたちにとっても、自分たちの街に新しいポテンシャルを見出す街歩きとなった。



所感、今後の展望など

これまで「ヨイタタンサケイカク」は建築・環境デザイン学科北研究室の学生が、表現媒体としては地図のみをターゲットに実施してきたが、今回はそれを全学科に開き、また表現媒体も自由とした。結果的に、7 人のうち他学科の学生は視覚デザイン学科 1 名、美術工芸学科 1 名（いずれも 2 年生）だけであったが、彼女らの存在は声や映像という新たな発想、ネットラジオという思いもよらない成果物につながった。

学生たちは、ラジオと街歩きイベントを組み合わせるという未知のチャレンジに対し、総合的なデザイン力を発揮してくれた。ラジオにおいては台本制作、収録時のトーク、音声編集、web ページ制作まで。イベントにおいては企画、広報、準備、当日の進行まで。また地元関係者、イベント参加や小学生たちとも積極的に対話を行っていた。

今後もプロジェクトとしては息長く継続し、与板の街のより多様な見方を発掘していきたい。

Upcycle project 「The ニュー」

期間：令和4年4月～令和5年3月

担当教員：池田 享史（視覚デザイン学科 助教）

中村 和宏（美術・工芸学科 准教授）

履修者数：55人

授業概要およびテーマ

長岡造形大の学生による長岡の為のガラスアップサイクル計画。

新潟県内で集められたリサイクル瓶（日本酒 720ml）の上部をカットし絵付け・加工を行う事で、瓶は新しいガラスタンブラーとして生まれ変わる。

さらに完成した商品にパッケージデザインを行い、長岡市の「ふるさと納税返礼品」として販売する（販売は市のふるさと納税サイト内）。

実施スケジュール

令和4年4月 オリエンテーション

令和4年5月 SDGs 及び Up cycle の講義

令和4年6月 デザインレクチャー、ガラス絵付け、焼き付け実習

令和4年7月 パッケージデータ提出、出力

令和4年9月 パッケージ カット組み立て

令和4年10月-12月 ロゴ制作、宣伝ツールの制作



実施状況及び成果

ガラスの手配から長岡市へのプレゼンまで、実施よりも段取り裏取りが非常に多かったが、努力の甲斐あって造形大初の「ふるさと納税返礼品」が完成した。

視覚デザイン領域の学生が8割程度いた為、美術工芸（ガラス）に触れられた事で新しい発見・視点が出来た事や領域を横断してコミュニケーションが取れた授業ができた。

所感、今後の展望など

商品制作半年、デザイン半年というスケジュール内容であった為、うまく切り替えが出来てよかった。

初めての实習であった為、クオリティーの担保が難しく、今後の課題にしたい。また、長岡工業高校の学生がThe ニューのプロジェクトを題材にしてドキュメンタリー映像を制作した（北信越大会出場）。



We love 錦鯉プロジェクト

期間：令和4年4月～令和5年1月

担当教員：吉川 賢一郎（視覚デザイン学科 准教授）

履修者数：13人

授業概要およびテーマ

令和3年度地域協創演習において開講した「We love 錦鯉プロジェクト」の継続プロジェクトとして令和4年度でも「We love 錦鯉プロジェクト2」の開講を実施する。令和3年度では、長岡錦鯉養殖組合との交流を深め、長岡市との協働連携を進めている（株）東急エージェンシーのご協力のもと、錦鯉の調査・取材・飼育を通して長岡の錦鯉あるいは錦鯉の本質を調査した。加えて、ブランドの基礎を構築し本質を鮮明にしていくプロセス（BRAND FOUNDATION）を学んだ。その過程の中で、ドローン撮影の修得、Twitter 漫画制作と公開、品評会動画制作にまで派生し「錦鯉の新たな魅力の発見、錦鯉の価値を高める」活動に広がっていった。

R4年度のプロジェクトでは、（株）東急エージェンシー3氏のご指導により、最前線で活躍するプロフェッショナルのアートディレクター・コピーライター・カメラマン・web デザイナーたちと協働で長岡錦鯉組合の「質の高い長岡錦鯉のファンサイト」の企画・制作を目的に、学生たちにとって実践的な経験のできるプロジェクトの実施を行う。

実施スケジュール

令和4年4月 オリエンテーション／リサーチと取材
令和4年5月 グループワーク
令和4年6月 長岡市錦鯉養殖組合との意見交換会
令和4年7月 長岡市へプレゼンテーション／現場視察
令和4年8月 ミーティング
令和4年9月 長岡市へプレゼンテーション／デザイン制作／デザイン完成
令和4年10月 施工準備／現場での施工作業／完成／マッチングハブ長岡出展
令和4年11月 撤去作業①／プロジェクト成果報告会
令和5年1月 撤去作業②

実施状況及び成果

「質の高い長岡錦鯉のファンサイト」だけでなく「錦鯉の新たな魅力の発見、錦鯉の価値を高める」ための様々な企画を立案し、長岡錦鯉養殖組合理事会と本学PJとの意見交換会とプレゼンテーションを行ったが、最終的に次の展開につなげることが実現できなかった。その後、長岡市農水産政策課から令和4年11月に行われる錦鯉

サミット開催イベントとして長岡を訪れる訪日外交団歓迎のための装飾デザインの依頼があり、JR 長岡駅構内の横断幕、JR 長岡駅からアオーレ長岡を繋ぐスカイデッキ内の装飾、アオーレ入口の自動ドア、フォトスポット、通路や大型ビジョンでの映像に至るまで、訪日外交団歓迎を盛り上げるための企画・制作・施工までを学生たちが行った。学生たちが手掛けたその装飾が好評だったため、サミット開催後の11月下旬まで装飾デザインは延長展示されたが、一部の装飾はお正月の門松と共に更に延長展示された。

このプロジェクトは、前例のない約2年の長期に渡る提案型のプロジェクトとなったことに加え、コロナ禍に於いて東京都に所在する株式会社東急エージェンシーターナルデザイン部の最前線で活躍するクリエイティブディレクター高田伸敏さん、アートディレクターの林俊美さん、コピーライターの神谷啓介さんに遠隔でご指導いただけたことも画期的であった。長岡市錦鯉養殖組合との協働は実現できなかったものの、テーマとなる「錦鯉」の取材・調査・分析と飼育を通して、ブランドの基礎を構築し本質を鮮明にしていくプロセス（BRAND FOUNDATION）を学び、実践的なデザインを経験し成果と評価を得ることができた。



大学内での錦鯉の飼育／錦鯉の紹介



授業風景／組合理事会との意見交換会



長岡市へのプレゼンテーション／現場視察



施工準備／現場での施工作業



訪日外交団ツアー当日の様子

所感、今後の展望など

落とし所が見えない問題発見・課題解決・提案型プロジェクトにおける予算確保の難しさ、コロナ禍における感染対策を考慮したオンラインでの遠隔指導、関係各所との連携や段取りを組むことの苦労はあったものの、株式会社東急エージェンシー・トータルデザイン部との産学連携によって、今までにない実践的なプロジェクトとなり、学生たちは大きく成長し大きな成果を出すことができた。また、これまでの産学連携でも課題となっていた学生移動については、タクシー会社との連携により学生移動手段の幅を拡げることができた。

※所属等はプロジェクト当時のもの

越後みしま竹あかり街道

期間：令和4年6月～令和4年10月

担当教員：北 雄介（建築・環境デザイン学科 助教）

履修者数：36人

授業概要およびテーマ

三島ライトアップ実行委員会が主催し、長岡造形大学が協賛するイベント「越後みしま竹あかり街道」の、1つの会場の空間演出を担うことで、地域貢献を行なう。空間演出のデザインだけではなく、竹の伐採や加工、設置、片付けまでを一貫して体験する。

実施スケジュール

令和4年6月 キックオフ（現地視察）

令和4年6月-7月 デザイン会議

～夏休み期間中、班に分かれて自主活動～

令和4年9月 伐採、加工

令和4年10月 設営、イベント、片付け

実施状況及び成果

コロナ禍の影響で、3年ぶりの現地開催となる本イベント。昨年度に本学キャンパスで開催した経験を活かし、三島の街道沿いの「長照寺駐車場」における空間演出や、街道全体を対象としたイベント企画などを行なった。

●キックオフ～デザイン会議

キックオフでは、現地で三島のライトアップ実行委員会メンバーと顔合わせをし、地域を案内してもらうことでプロジェクトへの理解を深めた。デザイン会議では6グループに分かれて活動し、260以上のアイディアを生み出した。



●班ごとの自主活動

「ユニット」「ウェーブ」「小物」「イベント」の4班に分かれ、自主参加で、試作を繰り返しながらそれぞれの担当部分を詰めていった。



●伐採～加工～事前設営

伐採は暑い日であったが、地元の方と協力しながら、4m×約200本分の竹を切り出した。加工は上記4グループで分担して行なった。高い集中力で作業をこなしたが、終わらなかった部分については予備日の作業となった。そして「ユニット」「ウェーブ」については、イベント当日のみの作業では難しいため、1週間前に有志メンバーで現地入りし、組み立てを行なった。



●イベント当日～片付け

迎えた当日には、まず朝から現地のボランティア、中学生や技大の留学生などと協力しながら、街道全体に竹を設置していった。そして16時の点灯式を合図に、火を灯して回った。3年ぶりの現地開催となる会場には、その直後から人であふれ、約1万人の来場があった。当日はやや天候が悪く、準備から本番までの間に何度か雨が降ったが、学生たちは十分な防寒対策をした上で、消えた火を自主的につけて回るなど、精力的に動いていた。各班の成果は…、

・「ユニット」班は、約3m角の立方体5つを制作。竹という丸く不揃いな材を使って安定した構造をつくることに苦心したが、「小物」班のランタンを吊るし、幻想的な情景をつくりだした。

・「ウェーブ」班は、高さ約2m、幅約10mにわたる巨大な竹のウェーブをつくりだした。投光器で色鮮やかにライトアップされた姿は圧巻であり、写真撮影スポットとしても喜ばれた。

・「小物」班は、ユニットに吊るすランタンや、ウェーブの前に並べる竹灯籠を作成した。両方ともに、これまでの竹あかり街道にはない独自の加工法を考案した。

・「イベント」班は、竹でつくった「変な生き物」を街道沿いに配置し、それを竹ランタンを持ちながら探しに行くという企画を実施した。本学で担当した敷地だけではなく、竹あかり街道全体を楽しめる企画であり、子どもを中心とした来場者にも、実行委員会にも喜ばれるものとなった。「変な生き物図鑑」と竹ランタンは、予定数の150をすぐに完売した。また竹を用いたアクセサリーの販売も行なった。

翌日の片付けは、制作したオブジェとの別れを惜しみながら、午前中の短時間で作業を終えた。

所感、今後の展望など

久々の現地開催となり、天候がよくないにもかかわらず多くの方が会場に詰めかけ、学生たちの力作に驚きの声をあげてくださった。特に大型構築物は、街道沿いの会場の中でも異彩を放っていた。竹でできた生き物を探して街道沿いを歩くイベントも、非常に好評であった。また実現までのプロセスにおいても、幹事や班のリーダーの学生を中心とした、数々の試作を通した粘り強い検討は見事であった。

学生たちの声を聞くと、かけた労力は大きかったが、かなり満足度の高いプロジェクトとなったようである。地域貢献ができたこと、学年や学科を越えた密な協働ができたことなどがその理由のようだ。来年度は幹事として再度参加したい、という学生もあらわれた。

課題としては、学生の負荷の軽減、安全管理の徹底などが挙げられた。これらを踏まえて今後、よりよい竹あかり街道としていきたい。



いいことをデザインする「かいしゃ」プロジェクト（4 大学 1 高専コラボ企画）

期間：令和 4 年 4 月～令和 4 年 10 月

担当教員：渡辺 誠介（建築・環境デザイン学科 教授）

北 雄介（建築・環境デザイン学科 助教）

徳久 達彦（視覚デザイン学科 准教授）

藪内 公美（美術・工芸学科 助教）

履修者数：4 人

授業概要およびテーマ

起業プラン、ビジネスプランを練り実際に外部のビジネスコンテストでピッチすることで若者やイノベーションデザインの起業プロセスの疑似体験をする。

長岡大学の起業家塾（8 月 16～19 日）、または Clip 長岡が実施するリーンローンチパッド（5/21～8/7 の間 週末 7 日間）に参加する。造形大生チームオンリーでも長岡大、技大、高専のメンバーと混成チーム何れも OK。

この経験をもとに 10 月に NaDeC 構想推進コンソーシアムが開催する Matching HUB 長岡の M-BIP（Matching HUB Business Idea Plan Competition）でピッチを行う。

実施スケジュール

令和 4 年 7 月 ガイダンス／リーンローンチパッド（LLP）か起業家塾か、両方かを選択

令和 4 年 5 月 LLP アイデア発想

令和 4 年 6 月 LLP 商品価値検証、ビジネスモデル設計

令和 4 年 7 月 LLP 収益モデル設計、ビジネスプラン化

令和 4 年 8 月 LLP デモ day／起業家塾（4 日間集中）

令和 4 年 10 月 NaDeC presents Matching HUB Nagaoka2022 M-BIP

実施状況及び成果

LLP に 3 名、起業家塾に 1 名参加し、それぞれ 3 大学 1 高専中、長岡崇徳大学を除く他大学生・高専生と混合チームを構成し、ビジネスプラン作成、発表を行った。



所感、今後の展望など

初めての試みではあったが、参加学生には一定の成果が上がった。

ただし、造形大生は圧倒的に少数派であり、かつ長岡技大や長岡高専生はデザインを学ぶ学生を表現のみしかしないものとの先入観があったようだ。

混合チームを組んだ学生は「狭義のデザインを担当して」と頼まれ、

プランそのものの協議に積極的にかかわれず、最初から分業状態になった経験に不満を述べた学生もいた。

今後造形大生の当該プログラムに数量的なプレゼンスが増えることが望まれる。

地域の「宝」や歴史・文化等の 地域資源活用提案

期間：令和4年10月～令和5年1月

担当教員：山本 敦（視覚デザイン学科 教授）

徳久 達彦（視覚デザイン学科 准教授）

履修者数：7人

授業概要およびテーマ

長岡市の地域資源を学生が巡り、学生（若者）の視点を生かした企画を考える。

活用する地域資源は、地域の「宝」、歴史・文化等の更なる活用・伝承事業懇談会成果報告書から地域資源を各班で選定する。対象地域は小国（小国和紙）、和島（良寛）とする。

履修者7名全員が現地の地域資源調査を行い、小国（4名）和島（3名）グループに分かれ、新たな活用方法の企画をまとめ、グループ毎にプレゼンテーションまで行う。

実施スケジュール

令和4年10月 ガイダンス、地域の宝見学、企画案・計画案提出

令和4年11月 企画チェック

令和4年12月 中間プレゼン、ブラッシュアップチェック

令和5年1月 ブラッシュアップチェック、最終チェック、プレゼンテーション

実施状況及び成果

小国グループは、小国和紙を素材として使用し、ギネスを目指そうというイベントプロモーション企画を提案。（市内小学生参加型企画）

和島グループは、成長型Vtuber「良寛」という企画提案で若者層への認知拡大を図った提案をおこなった。

履修した学生自身が良寛や小国和紙について、知識がない状況だったが、現地取材や調査によって、知識を深めることができた。

企画提案という段階なので、波及効果を測定することはできないが、2グループとも若者ならではの企画であり、地域の活性化への期待感があったのではないと思う。



所感、今後の展望など

実際の取り組むとなると、実施体制や予算などの再考が必要である。また、学生だけで取り組むのは実質的に無理がある。実際に行う場合は企業と連携して行う必要があるだろう。しかしながら、全国に知られていない長岡市の地域資源をいかに認知してもらえるかという若者視点のアイデアは今後も必要と考える。

SF プロトタイピングの実践 ～20XX 年の映像作家のとある一日～

期間：令和4年10月～令和5年1月

担当教員：森本 康平（大学院造形研究科 准教授）

履修者数：5人

授業概要およびテーマ

SF プロトタイピングとは、SF（サイエンス・フィクション）的な発想を元に、起こり得る未来の試作品（シナリオ、映像、イラスト、モックアップ等）を作ることで、他者と未来像を議論・共有するためのメソッドです。テクノロジーや社会情勢などの動向を複合的に学びながら、近未来の社会を想像し、その時代に生きる人物の社会観、抱える悩み、生活する街、使う道具などを考えます。

実施スケジュール

令和4年10月 ガイダンス

令和4年11月 シナリオ検討のためのインプット、シナリオ検討

令和4年12月 シナリオ検討、シナリオ進捗確認／ディスカッション

令和5年1月 アウトプット制作、プレゼンテーション／ディスカッション

実施状況及び成果

近年、ビジネス領域を中心に「SF プロトタイピング」という手法が注目されており、企業ミッションの策定、新規事業の創出、顧客とのコミュニケーションなどに活用されている。本演習は、この手法をベースに、デザイン教育としての活用を狙いとした「Future Prototype Learning」として再構築し、実践したものである。プログラムのフローを以下に示す。

① RESEARCH 調査

- ・コミュニケーションの過去・現在についてリサーチを実施。年表の形式で整理し情報を共有する。
- ・未来のキーワードが記載された「テクノロジーカード」、「ISSUE カード」、「価値観カード」の中から、各自2枚を選択し、キーワードについて調査した結果をまとめ、共有する。

② IMAGINATION 想像

- ・ブレスト形式で未来のプロットを考える→Future Piece カードを制作する
- ・Future Piece カードの中から1枚選択し、物語の軸を考える

③ EXTERNALIZATION 外化

- ・2052年の社会を舞台にしたシナリオを検討し、ショートシナリオ、イラスト等の形で視覚化する。

④ DISCUSSION 議論

- ・各自が制作したアウトプット（シナリオ）を共有し、設定や登場人物に関する質疑応答を行った後、シナリオに潜む問いを見つけながら、未来のテクノロジーや価値観、そしてそれらに紐づいた現代の問題についてディスカッションを行う。

プロジェクトには、多様な学年、学科から6名の学生が参加した。また、情報のインプットと整理を支援するため、大学院生2名と地域協創課職員1名がメンバーとして加わり、プロジェクトを進めた。最終成果物として、参加者が制作した6篇のSFシナリオと、リサーチやブレストで生まれたキーワードをまとめた[Future-Prototyping-Learning Magazine 0.0]という冊子を制作した。



所感、今後の展望など

過去・現在・未来のテクノロジーや、社会問題、価値観のリサーチを通して、30年後の社会のワンシーンをSFシナリオという形で具体化した。これは、未来を正確に予測するためのものでも、不都合な未来を変えるための革命を目標としたものでもない。“将来の社会やテクノロジーはどうあるべきか”という巨大なイシューに対し、

能動的に関与する姿勢を持つことを目指したものである。今回のプロジェクトにおいても、AI や食料危機など、大きなキーワードに着目した学生が多かったが、シナリオに登場するキャラクターの行動や気持ちを考えることで、そこに潜む課題や可能性を、自分ごととして捉える感覚が得られたように思う。最終成果物である冊子を配布し、参加メンバー以外の人と議論ができれば、より大きな学びに繋がったであろう。

なお、本学の学生はシナリオライティングについて学習したわけではないため、シナリオ制作の時間を多めに確保するプログラム構成とした。しかし、全体的にシナリオライティングのスキルが高いことが確認できたため、次年度はシナリオ制作をベースに、プロダクトや映像によるプロトタイプ制作を加えるなど、さらなる発展を目指したい。

ボランティア実習

ボランティア実習は、奉仕（ボランティア）精神を実社会で実現し、日頃修練している知見・技術を社会に還元する経験を積むことをテーマにした授業です。

Make A Wish ボランティアプロジェクト

期間：令和4年4月～令和4年7月

担当教員：池田 享史（視覚デザイン学科 助教）

履修者数：31人

授業概要およびテーマ

30周年記念事業に関する記念誌（30th Wish stories Book）のイラストレーション制作。子ども達、一人ひとりのストーリーを解釈し、オリジナルの挿絵（image）を2点制作する。メイクアウィッシュの活動を通じ、学生の社会における問題意識を高める。

実施スケジュール

令和4年4月 オリエンテーション→個別ストーリー振り分け

令和4年5月 イラストレーション UP

令和4年7月 Make A Wish Japan 事務局長 鈴木朋子さん 特別講演→レポート提出

令和4年8月 全体講評→本納品に関して個別指導

実施状況及び成果

Make A Wish で夢を叶えた子どもたち、一人ひとりのエピソードを理解し、そのストーリーに合ったイラストレーションを制作した。

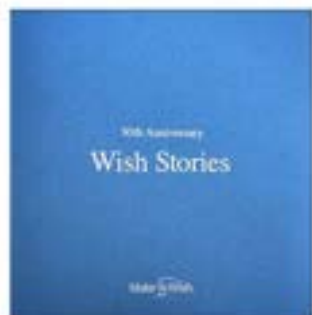
このプロジェクトに参加する事で「命の大切さ」を実感し、改めて死生感と向き合う教育の必要性を痛感した。当初は本に載せる挿絵の制作であったが、学生のレベルが様々であった事から、急遽お礼状への画像データ納品となった。

事務局長の講演を含め授業レポートの提出は実りある内容だった。また、最後に Make A Wish Japan からのお礼状や記念 BOOK を配本して頂き、心に残るエンディングになった。



所感、今後の展望など

生活様式や価値観が多様化する時代に、MAW に代表されるデザインなどのプロジェクトが社会に影響を与え続けられる可能性を広げていきたい。



フェニックス花火ボランティア

期間：令和4年4月～令和4年8月

担当教員：竹田 進吾（美術・工芸学科 教授）
山本 敦（視覚デザイン学科 教授）
菊池 加代子（プロダクトデザイン学科 教授）
藪内 公美（美術・工芸学科 助教）
池田 享史（視覚デザイン学科 助教）
福本 壘（建築・環境デザイン学科 准教授）
羽原 康成（建築・環境デザイン学科 准教授）

履修者数：24人

授業概要およびテーマ

長岡市の NPO 法人ネットワーク・フェニックスと提携するボランティア活動。長岡花火、フェニックス花火の歴史的経緯を知る。また、フェニックス花火募金活動、長岡花火大会当日ボランティア活動等に従事する。これらを通して、フェニックス花火に関する学びを深め、地域社会貢献としての奉仕活動の意義を理解する。

実施スケジュール

令和4年6月 ネットワーク・フェニックスの方の解説
令和4年7月 アピタ長岡で、5回のフェニックス花火募金活動に従事、長岡花火直前説明会
令和4年8月 長岡花火両日に、フェニックス花火観覧席でボランティア活動に従事

実施状況及び成果

6月8日 授業「都市論」（渡邊、Zoom 授業）の中で、NPO 法人ネットワーク・フェニックスの佐藤氏による長岡花火、フェニックス花火についての解説

・6月8日 履修者有志によるフェニックス花火募金活動時使用録音データ作成

・7月2日 アピタ長岡でフェニックス花火募金活動①（全回 10 時～13 時半頃）

・7月3日 アピタ長岡でフェニックス花火募金活動②

・7月10日 アピタ長岡でフェニックス花火募金活動③

・7月17日 アピタ長岡でフェニックス花火募金活動④

・7月24日 アピタ長岡でフェニックス花火募金活動⑤

・7月27日 ネットワーク・フェニックスの佐藤氏等を招いて、対面での長岡花火直前説明会（於大講義室）

・8月2、3日 長岡花火両日、フェニックス花火観覧席においてボランティア活動（ともに 11 時半～22 時 10 分頃）

・学生の期末課題レポート提出

・これらの学修活動のほか、個別に、DVD『この空の花 長岡花火物語』（大林宣彦監督作品）鑑賞と、道の駅ながおか花火館、長岡戦災資料館見学を強く推奨した



所感、今後の展望など

今年の長岡花火は、3年ぶりの開催ということもあって、コロナ問題以外でも困難があったと思う。そのような状況下、教員集団は、学生の安全面確保を重視して授業運営にあたった。

「フェニックス花火募金活動、長岡花火大会当日ボランティア活動に従事することを通して、フェニックス花火に関する学びを深め、奉仕活動が地域社会貢献として意義あることを理解できるようになる」という目標は、学生のレポートを参照すれば、達成できたことが理解できる。

今後も、NPO フェニックスと連携、交渉しながら学生の安全面を重視して授業運営していくことが望まれる。

地域特別プロジェクト演習

地域特別プロジェクト演習は、様々な領域の大学院生がチームを組み、地域が抱える実課題をテーマにプロジェクトとしての組み立て、フィールド調査、解決にいたるまでのプロセスを一体的に学び、新たな価値創造に取り組む演習授業です。

壊して気づくイノベーション

期間：令和4年5月～令和5年1月

担当教員：森本 康平（大学院造形研究科 准教授）

板垣 順平（大学院造形研究科 助教）

履修者数：4人

授業概要およびテーマ

日常生活のなかには様々なプロダクト、インフラ、景観、制度や仕組みなどがある。このプロジェクトでは、長岡市内をフィールドに、身近な生活環境から不具合であるにもかかわらず、その状態が維持されているものやことなど、壊すべき対象を見つけだし、俯瞰的な視点でその対象の壊すべき理由や目的を見出す。最終的には、破壊に繋がるアクションを通じて、対象の本質や存在意義についての理解を深化させることを目指す。

実施スケジュール

令和4年5月 事前説明，チームビルディング

令和4年6月-8月 第1段階：壊すべき対象の発掘

令和4年9月-11月 第2段階：破壊に繋がるアクション

令和4年12月-1月 成果物とりまとめ

令和5年1月 発表

実施状況及び成果

「壊して気づくイノベーション」をテーマとして掲げてから3年目の開催となるが、今回も各メンバーが発見した長岡の課題を元に、壊すべき対象を検討するところからスタートした。

当初、本学校舎内の傘置き場に関する課題を選定し、活動を開始したが、リサーチを進める中で、学内の他のプロジェクトで置き傘に関する取り組みが始まることが判明した。その取り組みと並行して進めるという選択肢もあったが、先方の担当者との調整の結果、企画を取り下げ、別のテーマを模索することにした。

そして、再度検討した結果、学内展示の際に、他学年や面識のない学生など、多様な人との意見交換や質疑応答が行われていないという現状に着目し、「学内展示の在り方」を破壊することをテーマとして決定した。

はじめに、学生を対象としたアンケートやインタビューを通して、問題の原因の探求と、解決案の方向性を検討した後、12月後半に学内のホワイエにて学生の展示と交流を狙いとしたイベント「N blend」を開催した。また、翌年1月には、場所や告知方法など、初回の反省点を改善したイベントを再度開催した。ロゴやポスターを制作し、イベントのブランディングに注力する一方で、開催自体に手間がかからないよう、空間構成については簡易

的に構築できるよう配慮がなされている。

特定の学科や授業課題に囚われない多様な作品を、カジュアルな雰囲気の中で展示し鑑賞させるという取り組みは、新たな学内展示の在り方の提案に繋がったと考える。また、授業以外でも自由に作品を展示し、フィードバックを得たいと考える学生が一定数いることが確認できたことも成果の一つと考える。ただ、展示場での滞留や制作者との交流のトリガーとなる施策として、コーヒーの提供を検討していたが、感染症対策のため断念せざるを得なかった。演習期間は終了したが、今後も継続的に実施し、当初の企画を達成してほしいと考える。



所感、今後の展望など

当初掲げたテーマが、他の取り組みと競合する可能性があることが判明した際、自身のアイディアに固執せずシフトチェンジしたこと、また、初回のイベントをプロトタイプとして位置づけ、期間内に2度目の改善イベントを開催したことは、プロジェクトマネジメントの観点から評価できると考える。

また、本プロジェクトにおいて提案されたイベントは簡易的な空間構成となっており、誰でも簡単に開催できるように配慮されている。さらに、ロゴやポスターデザインなども含め、イベントとしてパッケージ化されており、今回のプロジェクトメンバー以外でも開催しやすいように工夫されている。このようなプロジェクト内での活動は、授業期間内に実施して終了することが多いが、継続性も含めて検討されていることは、これまでにない成果と言える。今回の展示イベントに制作者として参加した学生を中心に、継続的に開催されることが期待される。

存在意義をデザインする パーパス・ブランディング&アクション

期間：令和4年5月～令和5年1月

担当教員：板垣 順平（大学院造形研究科 助教）

森本 康平（大学院造形研究科 准教授）

履修者数：6人

授業概要およびテーマ

SDGsの達成やDXの推進のように、「意識しなければならないこと」や「実施しなければならないこと」が目的や前提となった取り組みが多くある昨今の社会において、パーパス・ブランディングという考え方が注目を集めている。

パーパス・ブランディングは、個人と組織の両方の存在意義を明確にするとともに、それぞれの接点をうまく重ね合わせることで、目的や前提に囚われない成果やアウトプットの創出につながるほか、個人や組織のやりがいや誇りの醸成にも繋がることが期待されている。

このプロジェクトでは、行政や企業、民間団体などの外部団体等との連携を図りながら、パーパス・ブランディングをもとにしたアクションを実施し、その効果を検証する。



実施スケジュール

令和4年5月 ガイダンス

令和4年6月-9月 プロジェクト内容の企画・実施，情報共有

令和4年10月 情報共有

令和4年12月 プロジェクトの実施・検証，情報共有

令和5年1月 成果のまとめ、発表

実施状況及び成果

履修学生一人ひとりが得意とすることや専門性を生かすとともに、自身の理想やこうありたい、こうしたいという思いをパーパス（存在意義や理由）として抽出し、それらと地域課題や地域のニーズを接続するための活動を実施している。

今年度は、6名の大学院生が当該プロジェクトを履修し、地域コミュニティの形成や地域資源を活用したおもちゃ制作、開発途上国におけるデザイン教育の実施、古着交換を通じたコミュニケーションの誘発、長岡市内の小学生を対象としたアート×遊びの実施、地域愛着の醸成を図る商品と道の駅の周知化をテーマとして、それぞれが外部の組織や団体などに関わりながらプロジェクトを企画、実施した。

所感、今後の展望など

今回の演習を通じて、一人でプロジェクトを企画、実施するのではなく、自身のパーパスを他者に伝え、共感を得ること（=この指止まれ）を通してプロジェクトを企画、実施することでプロジェクトのレバレッジに繋がることや、持続的なプロジェクトの運用方法などを提示することができた。

いくつかのプロジェクトは演習後も継続されることから、今後の展開やさらなる成果に期待する。

Arts-Based Research

期間：令和4年9月～令和5年1月

担当教員：小松 佳代子（大学院造形研究科 教授）

岡谷 敦魚（美術・工芸学科 准教授）

履修者数：5人

授業概要およびテーマ

科学的研究とは異なり、芸術制作に根拠づけられた研究のあり方を創造する。実践の中で探究を深めることによって知が生成するような、実践と研究との往還をすることを目指す。成果物よりも研究のプロセスにおいて自らの実践を省察することを重視する。今年度は哲学書と歩く実践とを組み合わせた探究を行う。

実施スケジュール

令和4年9月 ガイダンス

令和4年10月 歩く実践

令和4年11月 中間報告会1

令和4年12月 中間報告会2

令和5年1月 最終発表会

実施状況及び成果

今年度は、博士（後期）課程の大学院生1名、修士課程の大学院生4名の参加であった。

はじめに、それぞれが関心のある哲学書を持ち寄り、紹介することから始めた。哲学書とは何かということが議論になり、そのことを考えながらも、まずは大学周辺を歩くことから始めた。行き先は決めず、じゃんけんして勝った人が行きたい方向に歩いて行く形で2時間半ほど歩いた。

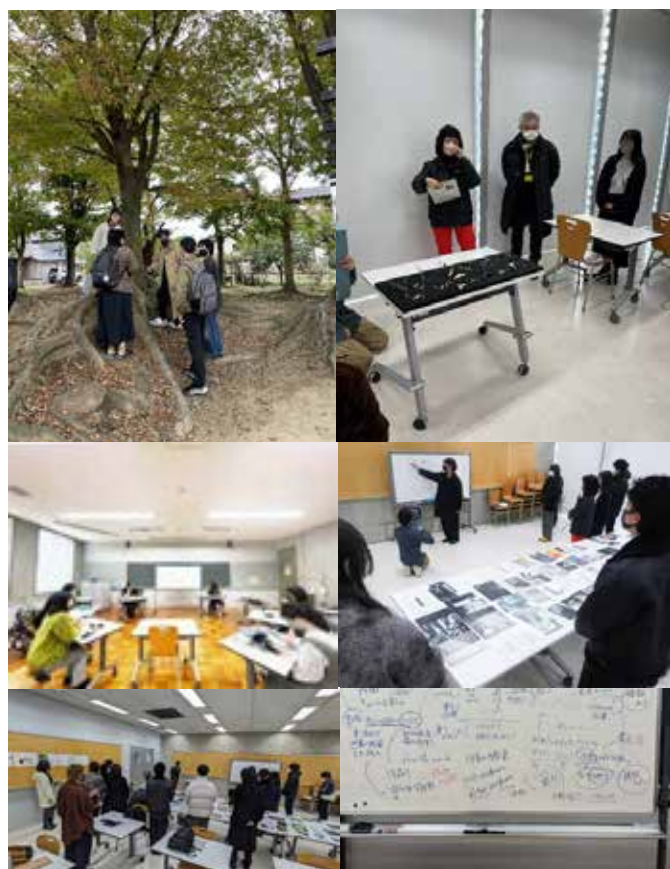
その経験で気になったことをそれぞれが持ち寄り、歩いていて気になったことを発表、それにコメントして議論した。自己の記憶や自然より人工物に惹かれること、自らの生まれた地域と長岡との違いといった、自己への省察を深める話が多かったように思う。

こうした経験を形にすることは日常的にやっている大学院生たちなので、この地域特別プロジェクト演習では、それとは異なるアプローチをとることを目指し、作品にするのではなく、「逆作品」をつくるということを次の課題にした。

次回までに「逆作品」を考えてくるという課題を出し、それぞれの考える逆作品について議論をした。作品と「逆作品」はどういう意味で逆なのか、逆作品をつくらうとすると、それも作品になってしまうというジレンマなど、活発な議論がなされた。このような議論を経て、発表では「作品ではないのではないかもしれないもの」を見せるということに落ち着いた。作品を目指すのではないし、作品ではないかもしれないけれど、作品ではないとも言

えないようなものという非常に難しい問いにそれぞれが挑んだ。

これは期せずして最初に設定した哲学的な問いともつながることになった。2023年1月17日に行われた発表会では、それぞれが考える「作品ではないのではないかもしれない」ものを展示し発表した。



所感、今後の展望など

目標をあらかじめ設定するのではなく、歩き、議論し、つくりながら考えるプロセスのなかで思考を深めていくというこの演習は、期せずして、作品制作におけるコンセプトづくりと似た行程になったように思われる。通常のPBLとは異なるやり方だが、それぞれの実践を問い直す機会になったと思う。

市民の生涯学習・ 文化活動の支援

長岡造形大学展示館「MàRoù の杜」

長岡造形大学展示館「MàRoù の杜」は、長岡市内で医師の傍ら画家として油彩・素描作品を制作してきた故・丸山正三画伯の約3,000点におよぶ絵画と、約8,000点の習作やスケッチを展示・収蔵するため、多くの市民・団体・企業などの寄付により2013年6月に開館しました。

令和4年度は、丸山正三絵画展及び2つの学科の教員作品・研究展を開催しました。

令和4年度開催展覧会



収蔵作品展

丸山正三の見たパリ

令和4年5月17日(火)～6月12日(日)

9:00～16:00 (月曜休館)

来場者数：688名



第4回企画展

建築・環境デザイン学科教員展

柏原信幸、北雄介、佐藤淳哉、白鳥洋子、菅原浩、津村泰範、羽原康成、平山育男、福本壘、森望、与那嶺仁志、渡邊誠介

令和4年7月5日(火)～7月31日(日)

9:00～16:00 (月曜日休館)

来場者数：659名



第5回企画展

美術・工芸学科教員展

市川治郎、遠藤良太郎、菅野靖、岡谷敦魚、小林花子、中村和宏、長谷川克義、藪内公美

令和4年10月11日(火)～11月13日(日)

9:00～16:00 (月曜日、10月22、23日休館)

来場者数：958名

市民工房



期 間：前期／令和 4 年 5 月～ 9 月 後期／令和 4 年 10 月～令和 5 年 3 月

場 所：長岡造形大学 市民工房

参加料：各講座指定の受講料及び材料費

参加人数：239 名

前期講座

- 【硝子講座】 バーナーワーク とんぼ玉基礎／とんぼ玉応用／スカルプチャー
講師：柳沼 斎子
フュージング／ステンドグラス
講師：丸山 淳代
パート・ド・ヴェール基礎／パート・ド・ヴェール応用
- 【陶 芸】 絵付けを楽しむ磁器
講師：長谷川 由香
- 【漆 芸】 螺鈿細工手鏡／漆工芸 1／漆工芸 2
講師：藤橋 郁美子
金継ぎ／漆器
講師：飯塚 直人
- 【木 工】 木の器
講師：飯塚 直人
- 【染 織】 藍染めの裂き織りバッグ
講師：齋藤 伸絵

後期講座

- 【硝 子】 バーナーワーク とんぼ玉／とんぼ玉応用／スカルプチャー
講師：柳沼 斎子
フュージング／ステンドグラス
講師：丸山 淳代
パート・ド・ヴェールⅠ／パート・ド・ヴェールⅡ
講師：近藤 綾
- 【漆 芸】 厚貝螺鈿細工／漆工芸 1／漆工芸 2
講師：藤橋 郁美子
金継ぎ
講師：飯塚 直人
- 【染 織】 アルパカのレース織マフラー
講師：齋藤 伸絵

通年講座（前期・後期）

- 【染 織】 染織 1 年／染織 1 年応用
講師：齋藤 伸絵

市民工房は「ものづくり」を通して市民と大学がつながり、大学をより身近に感じてもらう取り組みとして、また、文化あふれる新潟県の実現を目指して、平成 22 年春に市民向けの工房を開設しました。

令和 4 年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止に配慮しつつ、3 年ぶりに市民工房で硝子・陶芸・漆芸・木工・染織の講座を 239 名が受講しました。

※所属等はプロジェクト当時のもの

こどもものづくり大学校



「まなび」と「あそび」の観点から、ものづくりを通して豊かな感性と創造力を育むことを目的に、小学生を対象とした「こどもものづくり大学校」を平成 23 年から開講しています。

令和 4 年度は新型コロナウイルス感染拡大の防止対策を行いながら、オンライン講座と対面講座を実施し、全 8 種類の講座に延べ 158 人の小学生が参加しました。

学生スタッフと小学生が交流しながら作品を完成させていく形で講座を実施することができました。

前期

【オリジナル電飾看板をつくろう】オンライン講座

講師：森本 康平（大学院 准教授）

参加人数：10 名

日程：全 3 回（5 月 29 日（日） 6 月 5 日（日） 6 月 19 日（日） 10:00-12:00）

【板ガラスを組み合わせて時計をつくろう】

講師：近藤 綾（市民工房 講師）

参加人数：15 名

日程：全 2 回（7 月 3 日（日） 7 月 31 日（日） 10:00-12:30）

後期Ⅰ

【ダンボールの中の世界】

講師：佐藤 淳哉（建築・環境デザイン学科 教授）

参加人数：16 名

日程：10 月 30 日（日） 9:30-12:30

【厚貝螺鈿アクセサリー&キーホルダー】

講師：藤橋 郁美子（市民工房 講師）

参加人数：18 名

日程：11 月 13 日（日） 9:30-12:00

【大学生と一緒に学ぼう、キラキラプログラミング！】

講師：福野 泰介（株式会社jig.jp / KDDI 株式会社）

参加人数：34 名

日程：12 月 3 日（土） 14:00-15:40

後期Ⅱ

【カーデザイナーになろう】

講師：齋藤 和彦（プロダクトデザイン学科 教授）

参加人数：20 名

日程：2 月 19 日（日） 9:30-12:30

【ガラス瓶でこものをつくろう】

講師：近藤 綾（市民工房 講師）

参加人数：25 名

日程：2 月 26 日（日） 9:30-12:30

【映像クリエイターになってみよう！】

講師：島村 恭兵（株式会社コンドルレック ビデオグラファー）

海津 千並（umesphoto フォトグラファー）

参加人数：20 名

日程：全 2 回（3 月 5 日（日） 3 月 12 日（日） 13:00-16:00）

まちなかキャンパス長岡



まちなかキャンパス長岡は、市民の方々の「学び」のニーズに応え、世代や地域を越えた交流をより盛んにすることを目的に、長岡市内の4大学・高専（長岡技術科学大学、長岡大学、長岡崇徳大学、長岡工業高等専門学校と本学）が長岡市と連携して企画運営しています。

長岡駅前を拠点に、「まちなかカフェ」「まちなか大学」「まちなか大学院」「こども講座」など様々なテーマの講座をプロデュースし、各講座では4大学・高専の教員を始め、多くの方が講師を務めています。本学教員らも専門分野の枠を超えて講座を行いました。

■まちなかカフェ

令和4年5月14日（土）	ブラツムラ with キタ	ー柿川後編ー	准教授	津村 泰範
令和4年5月14日（土）	ブラツムラ with キタ	ー柿川後編ー	助教	北 雄介
令和4年6月6日（月）	灯り語		教授	佐藤 淳哉

■まちなか大学

令和4年6月毎週木曜	生き残る防災力を身につける	ー自助・共助の推進ー【全5回】の講座内容の企画及び「災害時の企業による地域復興・復興活動の視点から学ぶ防災」の講演	准教授	福本 壘
令和5年2月1日（水）	ヨソモノが伝える長岡のモッタイナイ！	ー長岡の地域おこし協力隊ー【全5回】 ①地域おこし協力隊ってどんなオシゴト？	研究員	軍司 円
令和5年2月22日（水）	ヨソモノが伝える長岡のモッタイナイ！	ー長岡の地域おこし協力隊ー【全5回】 ④地域風景の魅力ってなんだろう？	長岡市×長岡造形大学大学院イノベーター育成プログラム 2期生	三浦 尚悟

■まちなか大学院

令和4年11月14日（月）	あなたが考える「長岡×SDGs」【全10回】	②事例1：プロダクトデザインとSDGs	教授	境野 広志
---------------	------------------------	---------------------	----	-------

■こども講座

令和4年7月31日（日）	韓国の紙文化体験	韓紙チョガッポ	准教授	金 峯洙
令和4年8月4日（木）	仕掛けが楽しい飛び出すカードをつくろう！		教授	天野 誠
令和4年8月10日（水）	みんなで景観たんてい団	ー醸造のまち摂田屋編ー	准教授	津村 泰範

第 25 回長岡市中学校美術部作品展



日時：令和 4 年 10 月 8 日（土）13:00～17:00
 令和 4 年 10 月 9 日（日）9:00～15:00
 会場：新潟県立近代美術館 2 階ギャラリー
 来場者数：595 名
 主催：長岡造形大学
 共催：新潟県立近代美術館、長岡悠久ライオンズクラブ
 後援：長岡市教育委員会

本学専門分野の入口で努力している長岡市内中学校美術部の部活動を支援することを目的に実施しており、コンクール形式としないことで自由に活動成果を発表できる場を提供しています。

新型コロナウイルス感染症の影響で会場での開催は中止が続きましたが、第 25 回となる令和 4 年度は 3 年ぶりに会場で実施し、長岡市内 13 校の 230 名の作品が一室に並びました。（展示数 225 点 うち平面 207 点、立体 18 点）作品がアップできる特設サイトも制作し、329 作品を掲載しました。

尚、ポスター・フライヤー、パンフレットの原画は中学生が描きました。

※所属等はプロジェクト当時のもの

第 24 回亀倉雄策賞受賞記念 大貫卓也展「ヒロシマ・アピールズ」 同時開催：JAGDA 新人賞展 2022 佐々木 拓・竹田 美織・前原 翔一



会期：令和 4 年 12 月 11 日（日）～ 12 月 18 日（日）

会場：新潟県立近代美術館 2 階ギャラリー

来場者数：延べ 372 人

主催：長岡造形大学、新潟県立近代美術館、公益社団法人日本グラフィックデザイン協会（JAGDA）

協力：クリエイションギャラリー G8、亀倉雄策賞事務局、JAGDA 新潟地区

■関連イベント

12 月 11 日（日）

10:00-12:00 ポートフォリオ講評会（大貫 卓也）

会場：本学ゼミ室 A

本学視覚デザイン学科 3 年生 7 名参加

13:30-14:30 第 1 部 JAGDA 新人賞 2022 受賞者講演会

講師：佐々木 拓・竹田 美織（当日欠席）・前原 翔一

（進行：吉川 賢一郎／長岡造形大学准教授）

会場：長岡造形大学大講義室（オンラインでも配信）

14:45-15:45 第 2 部 第 24 回亀倉雄策賞 受賞者講演会

講師：大貫 卓也

会場：長岡造形大学大講義室（オンラインでも配信）

第 1 部及び第 2 部入場者数：96 名（本学学生 69 名、一般 21 名、関係者 6 名）

亀倉雄策賞は、1997 年に急逝したグラフィックデザイナー亀倉雄策（新潟県燕市出身）の生前の業績をたたえ、グラフィックデザインの発展に寄与することを目的として設立されました。運営と選考は公益社団法人 日本グラフィックデザイナー協会（JAGDA）が行い、毎年、年鑑『Graphic Design in Japan』出品作品の中から、最も優れた作品とその制作者に対して贈られます。第 24 回は、大貫卓也氏の平和希求キャンペーンポスターおよび関連制作物「HIROSHIMA APPEALS 2021」が高く評価され、選出されました。

一方、毎年『Graphic Design in Japan』出品者の中から、

39 歳以下の新鮮かつ作品の質の高いデザイナーに「JAGDA 新人賞」を贈っています。この賞は 1983 年来、いまや第一線で活躍する 119 名のデザイナーを輩出し、デザイン・広告関係者の注目を集めています。40 回目となる今回は、新人賞対象者 137 名の中から厳正な選考の結果、佐々木拓、竹田美織、前原翔一の 3 氏が選出されました。

受賞作品を集めた展覧会を開催し、会期初日には受賞者による開催記念講演を行うなど、地域の方や学生から世界に誇るグラフィックデザインの現在をご覧ください。機会となりました。

※所属等はプロジェクト当時のもの

特別講義

地域・市民の方々と大学の交流、地域発展に寄与することを目的に、本学では特別講義を一般の方に公開しています。令和4年度は「美術・工芸特別講義」、「建築・環境デザイン特別講義」全8回を公開しました。

美術・工芸特別講義(全4回)

- 令和4年10月28日(金)
男性を「美人画」にーイケメン描いて18年
講師：木村 了子(アーティスト・画家)
- 令和4年12月9日(金)
つくること
講師：富井 大裕(美術家、武蔵野美術大学造形学部彫刻学科 教授)
- 令和4年12月16日(金)
光のカタチと鋳玻璃(いはり)について
講師：扇田 克也(ガラス造形家)
- 令和5年1月20日(金)
コンテンポラリージュエリーの世界
講師：周防 絵美子(ジュエリー作家)

建築・環境デザイン特別講義(全4回)

- 令和4年11月4日(金)
続・歴史的建造物の価値
発見と創造
講師：後藤 治(工学院大学 理事長、総合研究所 教授)
- 令和4年11月11日(金)
国際協力の現場でのコミュニティデザイン
～シリア難民のトルコのホストコミュニティとの社会的結束強化事例を通して学ぶもの～
講師：伊藤 拓次郎(学研トルコ 代表取締役、インストラクショナルデザイナー)
- 令和4年11月18日(金)
建築ストックの有効活用における専門家の役割
ーひらかれる建築・「民主化」の作法ー
講師：松村 秀一(東京大学大学院特任教授)
- 令和4年12月2日(金)
脱炭素社会実現のための建築分野の役割
講師：田辺 新一(早稲田大学教授、日本建築学会長)

出張講義



上川西ニコニコ大学

日時：令和5年3月16日(木) 13:30～14:30

会場：上川西コミュニティセンター

講師：羽原 康成(建築・環境デザイン学科 准教授)

演題：「生活環境のバリアフリー」

対象：上川西地域住民

主催：上川西コミュニティセンター

本学近隣の上川西コミュニティセンターを会場に「ニコニコ大学」と題して本学教員の講演会が開催されました。

ニコニコ大学は、同センターが主催する高齢者向けの生涯学習教室で、10年以上前から年1回程度、本学の教員も講義を行っています。

今回は羽原准教授が「生活環境のバリアフリー」という演題で講演し、参加者からはとても興味を持ちながら聴講いただきました。

熱中！感動！夢づくり教育「夢づくり工房 in 長岡造形大学」



長岡市が取り組む「熱中！感動！夢づくり教育事業」の一環として「夢づくり工房 in 長岡造形大学」と題し、本学を会場としたものづくり講座を提供しました。

令和4年度も定員を大きく上回る応募となりました。2講座計4回を実施し、こどもたちは目を輝かせて真剣に取り組み、ものづくりの楽しさをたっぷり味わってくれました。

日時：令和4年8月9日（火）

会場：長岡造形大学

主催：長岡市

講座：①「布を青く染めよう！」

講師：菊池 加代子（プロダクトデザイン科 教授）

対象：小学1～6年生

参加人数：20人

②「日韓の紙文化体験！」紋切りあそび&韓紙チョガッポ

講師：金 峯洙（視覚デザイン学科 准教授）

対象：小学1～6年生

参加人数：20人

長岡造形大学附属図書館



附属図書館は本学における教育および学術研究の向上を図るために必要な図書館資料を収集、整理、保管しています。デザイン、アートに関する専門書をはじめ、最新のデザイン、アートの潮流を伝える専門雑誌や、各種メディアによる視聴覚資料まで揃っている他、貴重書や独自のコレクションも充実しています。

義務教育終了以上でデザインに興味を持って学習・研究する一般の方へ、図書館を開放しております。利用を希望する方は、運転免許証など本人が確認できるものを持参の上、カウンターに申し込んでください。図書館利用証を発行します。なお、利用は閲覧のみで貸出はできません。



公立大学法人

長岡造形大学

Nagaoka Institute of Design

長岡造形大学 地域協創センター

〒940-2088 新潟県長岡市千秋4丁目197番地

Tel : 0258-21-3321 Fax : 0258-21-3362

E-mail : chiiki@nagaoka-id.ac.jp



長岡造形大学 地域協創センター

<https://www.nagaoka-id.ac.jp/about/society/>



長岡造形大学 フェイスブック

<https://www.facebook.com/nagaoka.id/>



長岡造形大学 ツイッター

https://twitter.com/n_i_d